

A Survey of Khünkhüree Sites in Mongolia and Their Significance : A Basic Study on the “Konggulie granary” of the Yuan Dynasty

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 白石, 典之, 相馬, 秀廣, 加藤, 雄三, エンフトル, A.
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://doi.org/10.15021/00003924

モンゴル国フンフレー遺跡群の調査とその意義 ——元代「孔古烈倉」の基礎的研究——

白石 典之*・相馬 秀廣**・加藤 雄三***・A. エンフトル****

A Survey of Khünkhüree Sites in Mongolia and Their Significance:
A Basic Study on the “Konggulie granary” of the Yuan Dynasty

Noriyuki Shiraishi, Hidehiro Sohma, Yuzo Kato, Enkhtör Altangerel

モンゴル高原は、そのすべてが遊牧に適した水や草の豊かな地帯ではない。険しい山地や乾燥地が広範囲にみられ、その中に遊牧可能な小地域がパッチ状に点在しているのが実像である。モンゴル高原に成立した歴代の遊牧国家の版図は、一見すると広大だが、じつはこのような小地域の集合体と考えた方がよからう。遊牧だけでなく、農耕や手工業も、このような限られた生活空間でおこなわれていた。一つ一つの小地域が自立あるいは他地域の欠落点を補完しながら、有機的に結合することによって、遊牧国家の領域が成り立っていたと考える。そうであるならば、それぞれの小地域内の自然環境や生産力、歴史的変遷などを知ることで、遊牧国家の興亡の背景の一端が明らかになるはずだ。

このような視点に立って筆者らは、モンゴル国ウブスハンガイ県フンフレー地区で調査をおこなった。そこはゴビ地帯にあるオアシスで、13～14世紀の遺跡があり、文献史料にも登場する。考古学、歴史学、地理学などが協力して学際的にアプローチできる、格好の地域といえる。

その結果、この地域はモンゴル帝国時代には「孔古烈」とよばれ、豊富な湧水を利用して、モンゴル高原の中心地カラコルムへ食糧を供給した農耕地帯であったことがわかった。あわせて、この地はゴビ砂漠の南北縦断路と、アルタイ山脈北麓を通るモンゴル高原の東西横断路の交点で、交通の要衝であるとともに、軍事的攻防の舞台であった。これらのことから、今後モンゴル帝国の興亡史を研究する上で重要な地域になると指摘した。

* 新潟大学

** 奈良女子大学

*** 総合地球環境学研究所

**** モンゴル科学アカデミー考古学研究所

Key Words : Mongolia, Mongol empire, Khünkhüree, Konggulie, Kharakhorum

キーワード : モンゴル, モンゴル帝国, フンフレー, 孔古烈, カラコルム

Not all areas of the Mongol plateau are rich in water and grass, vital for nomads. Steep mountainous regions and arid terrain stretching for miles are dotted with small parcels of land where nomads can survive. The territory of the successive generations of nomadic states which established themselves on the Mongol plateau may appear vast at first glance, but it should really be considered as a collection of these small parcels. Not only nomadism, but also farming and cottage industries were carried on in these restricted living spaces. Probably the nomadic states were formed by organic bonding among small areas as individual parcels became self-reliant or could provide what another parcel lacked. If this is the case, then by analyzing aspects such as the natural environment, productive strength and historical transformation within each individual parcel, we should be able to throw light on the background to the rise and fall of the nomadic states.

From this perspective, the authors investigated the Khünkhüree district in Mongolia's Övörkhongai Prefecture. In an oasis in the Gobi region, there are remains from the 13th–14th centuries which are also mentioned in written records. This area is well-suited to an interdisciplinary approach by archaeology, historical study and geography.

As a result, we discovered that the area was called *Konggulie* during the period of the Mongol empire and was a farming area, utilizing abundant underground water, which supplied provisions to Kharakhorum in the center of the Mongol plateau. The area lay at the crossroads between the route which cut through the Gobi desert from north to south and the route which ran east-west across the Mongol plateau past the northern foothills of the Altai mountain range. We show that as well as being a strategic point for traffic, the fact that it was a stage for military attack and defense makes it an important area for future research into the history of the rise and fall of the Mongol empire.

1 問題の所在	3.3 現地調査
1.1 遊牧王朝をめぐる課題	3.4 湧水と流路
1.2 カラコルムについての先行研究	3.5 湧水の存在とその役割
1.3 生産拠点研究における課題	3.6 耕地の立地環境
2 文字資料の調査	4 考古学的調査
2.1 古地図の検討	5 総合的検討
2.2 文献史料の検討	5.1 年代の確定
2.3 青銅印の検討	5.2 交通の要衝
3 地理学的調査	5.3 農耕の痕跡
3.1 巨視的自然条件	5.4 倉庫の存在
3.2 空中写真・衛星画像の判読	6 結語

1 問題の所在

1.1 遊牧王朝をめぐる課題

モンゴル高原には歴史上、匈奴、突厥、ウイグル、モンゴルといった強大な王朝が誕生したが、なぜそのような王権が成立できたのか、その興亡の背景など、いまだ不明な点が多い。

そこは高緯度かつ内陸に位置し、冷涼で著しく乾燥した、厳しい自然環境の地である。おもな生業は当地の植生に合った遊牧という粗放な牧畜であるが、それがわずかな気候変化にもダメージを被ることは、近年多発している雪害や旱魃の被害をみてもわかる。遊牧によって育まれた機動力に富んだ騎馬軍団による侵略がモンゴルの諸王朝を支えたということが、しばしば人口に膾炙されるが、遊牧経済の脆弱性を鑑みると、それだけではないことは自明であろう。

たしかに中国や中央アジアの農耕地帯へ侵攻し、略奪をおこなうことは、遊牧の欠落点や脆弱性を補う効果があった。もちろん交易という平和的な交渉もあった。このような和戦両面のチャンネルでもたらされた食糧や布帛などの物資は、遊牧民たちの生活を救荒だけでなく日常でも支えた。

同時に、物品以外に、人的な資源も周辺地域から高原へもたらされた。農民や窯業・金属加工などの手工業従事者がそれである。拉致されたり逃亡したりと、彼らの来歴はさまざまだが、高原の各地に定住して、生産活動に従事した。私たちはこの点に、もっと目を向けるべきだと考えている。なぜなら、騎馬軍団が装着した鉄製の馬具や武器、日用雑器として用いられた陶器など、軍事から生活の隅々に至るまで、外来の定住技能者の関与が想定できるからである。

たとえば、ロシアで見つかった匈奴時代のイヴォルガ（Ivolga）遺跡では、鉄工房が設けられ、鉄製武器や農具が作られていた。おそらく付近では農耕が営まれていたと考えられる。漢式陶器が数多く出土していることから、その住民の多くは漢人系であったと想定され、自分たちで道具を調え、生産活動に従事していたと考えられている（林 1999: 29）。私たちは同様な拠点がモンゴル高原各地に数多く設けられ、そこでの生産活動が伝統的な遊牧とともに王朝を支え、その強大化に深く関わっていたと想定している。

しかしながら、遊牧という移動生活と定住生活、草地を利用する牧畜とそれを耕地

へと変える農耕，そのような相反する活動が，どのように共存していたのだろうか。

モンゴル高原は険しい山地や乾燥地が広範囲にみられ，その中に水や草の豊かな地域がパッチ状に点在しているのが実像である。遊牧だけでなく，農耕や手工業も，このような限られた生活空間でおこなわれてきた。モンゴル高原に成立した歴代の遊牧国家の版図は，一見すると広大だが，じつはこのような小地域の集合体と考えた方がよからう。一つ一つの小地域が自立あるいは他の地域の欠落点を補完しながら，有機的に結合することによって，遊牧国家の領域が成り立っていると考え（白石 2002: 342-379）。そうであるならば，それぞれの小地域内の自然環境や生産力，歴史の変遷などの分析で，遊牧国家の興亡の背景の一端が明らかになるはずだ。

また近年，遊牧地域における耕地拡大と定住化促進が，さまざまな弊害をもたらしていることは，広く知られている。遊牧王朝の土地利用の在り方を解明することは，歴史的関心だけでなく，現代的課題を考える上でも，けっして無意味ではないように思える。

そこで私たちが企図したのは，定住生産拠点遺跡の発見とその学術調査，あわせて，遺跡が存在する地域圏における，当時の土地利用の在り方を復元することである。考古学調査はもちろん，地理学的な立地環境調査，歴史学的な史料精査などを総合的に実施して，一つの地域圏での生産活動の解明を進めたい。

1.2 カラコルムについての先行研究

そこで私たちが注目したのが，モンゴル高原中央部に位置するオルホン（Orkhon）川上流域である。ここは突厥，ウイグル，さらにモンゴル帝国が拠点を置いた場所で，その初期の首都カラコルム（Kharakhorum）があったことで知られている。王権の中枢に近く，文字資料も比較的豊富に残されている格好のフィールドである（図1）。

ユーラシア大陸の大部分を征服したモンゴル帝国第2代君主ウゲデイ（オゴタイ）は，1235年に首都カラコルムを造営した。現在，カラコルムの遺跡は，モンゴル国の中部，ウブスハンガイ（Övörkhangai）県ハルホリン（Kharkhorin）郡にある。カラコルム遺跡には多くの建物遺構が残っている。そこに大規模な都市があり，多くの住民が居住し，さまざまな生産活動に従事していたことが考古学的に想定できる。

しかしながら，文献史料によると，ウゲデイ，第3代グユク，第4代モンケといった君主たちは，カラコルムには常住していなかったことがわかる。滞在したのは春先と夏の始めの2回で，しかも数日だけであった。それでは君主たちはどこで暮らしていたのか。彼らはカラコルム周辺に，春夏秋冬それぞれの季節離宮を造り，それらを

一年間かけて周回していた (Boyle 1974: 146)。

離宮の所在地の特定は、古くより研究者の興味を惹くところとなった。那珂通世、箭内互、ボイル (J. A. Boyle) らは、史料の記述から、離宮の所在地の推定と、それに基づく君主の季節移動ルートの復元を試みた (那珂 1943; 箭内 1966; Boyle 1974)。しかしながら、それらの復元案は現地でのフィールドワークに基づいてなかったもので、机上の議論に終わってしまった。

一方で、モンゴル人のペルレー (Kh. Perlee) やマイダル (D. Maidar) はフィールドワークをおこない、考古学的遺跡からモンゴル帝国歴代君主の季節離宮跡を特定しようと試みた (Perlee 1961; Maidar 1970)。しかし、遺跡の年代決定法が未確立であったことや、史料の誤解によって、目的を達成することはできなかった。

その後、カラコルムとその周辺とを、離宮以外にも手工業や農業などの生産拠点も含めて、ひとつの地域圏として総合的に捉えようとする研究が、陳得芝や吉田順一をはじめとしておこなわれるようになった (陳 2005; 吉田 1983)。つづいて杉山正明は「カラコルム首都圏」という概念を設定し、そこがモンゴル帝国の興隆に大きな役割を果たしたと重視した (杉山 1989: 5, 1992: 116)。しかし、いずれもフィールドワークに則していなかったため、具体的な生産活動や史料に登場する場所の特定など、細部にわたる復元には至らなかった。

近年では、モーゼス (L. Moses) とグレール (C. Greer) も「都市圏」という概念を用いて、カラコルム周辺の人口や、農業や手工業の生産関係の復元を試みた (Moses



図1 フンフレー遺跡群位置図

and Greer 1998)。彼らの研究方向は興味深いものではあるが、論文中に図示されたカラコルムの位置、および離宮の想定位置は、考古学的根拠のない誤ったもので、歴史地理的研究としては評価できない。「カラコルム首都（都市）圏」の復元には、史料に登場する地名を、具体的な遺跡として正しく特定することが、まずおこなわれるべきである。

筆者の一人である白石典之は1995年からカラコルム地域で考古学的なフィールド調査をおこない、春と冬の離宮を特定し、また、夏と秋の離宮の候補地を、ある程度絞りこむことに成功した。さらに、離宮以外にも生産拠点と考えられる新たな遺跡を発見した。それに基づき、南北約250 km、東西100 km、面積は約14,000 km²にも及ぶ「カラコルム首都（都市）圏」を改めて提唱した（Shiraishi 2004）。そこは当時、モンゴル帝国の政治・経済・文化の中心であった。その地域の調査・研究を深化させることが、モンゴル帝国の国家構造と、強大化の背景を解明することに有効であると考ええる。

1.3 生産拠点研究における課題

その「カラコルム首都（都市）圏」を調査研究する場合、注目すべきは生産拠点と考えられる遺跡であろう。そのなかでもとくに農業と関連する遺跡を重視したいと考える。当時モンゴル高原に暮らす人々の中で、中国系の人々だけでなく、在地の遊牧民たちも穀物を食していたことが、当時の旅行記に記されている（カルピニ 1989: 22）。さらに、実際に当時この地方を旅した『長春真人西遊記』、『嶺北紀行』などの旅行記中の記載から判断すると、モンゴル高原ではオルホン川などの主要な河川の流域で、農耕がおこなわれていたことがわかる。

ところが、草地を耕地に変える農業は、遊牧に反する生業と位置付けられ、モンゴル遊牧地域史の先行研究では、あまり重視されてこなかった。だが、実際には、カラコルム周辺でも、モンゴル帝国期初頭から農業が営まれ（松田 1994: 288）、元朝期に入ると、さらに農業生産の向上に力を入れていたようすを、各種史料から知ることができる（白石 2002: 82–84）。しかしながら、これまでカラコルム周辺で、耕作地など農業関係の遺跡は発見されていない。

やや年代が降り、元朝期に入ると、カラコルムは漠北の中心地であるという位置は変わらないが、国家の中での相対的な位置づけは低下し、一地方都市となった。ただ、シリギ・カイドウの乱といった戦乱が続く中で、軍事拠点としての重要性は高まった。相次いで漠地から兵が増強され、カラコルム周辺は急激に人口増加していった。それ

に伴い、食糧確保が喫緊の課題となっていた（白石 2002: 82-84）。

そのなかで特筆される動きがあった。『元史』によると、1302（大徳6）年に「和林」「昔宝赤八剌哈孫」「孔古烈（列）」の3か所に倉が設けられたという記述がある²⁾。「和林倉」はカラコルム周辺で営まれていた「和林屯田」で収穫された穀物を保管するための倉であった³⁾。同様に「昔宝赤八剌哈孫倉」と「孔古烈倉」も、周辺で収穫された穀物を貯蔵するためのものであっただろう。『大元倉庫記』によると、「和林」「昔宝赤八剌哈孫」「孔古烈」の3倉が収支する倉糧が膨大なものであって、元朝の政治中枢からも重要視されていたこと、そのために当該倉官の機構を整備したことが明示される⁴⁾。また、この3倉はカラコルムに治所を置く「和林宣慰司」の所轄とあり、カラコルム都市圏に属する農業生産拠点のひとつであったことがわかる。その位置が特定でき、耕作地が遺構として検出できれば、カラコルム都市圏の農業、ひいてはその生産基盤の実態が復元できよう。

陳得芝は、「和林倉」は史料の記述通りカラコルム付近、また、「昔宝赤八剌哈孫倉」は『元史』に「汪吉昔博赤城」とあることから⁵⁾、「汪吉（Wang ji）」すなわち現在のオンギ川（Ongi）流域と考えた（陳 2005: 196）。「汪吉」がオンギ川のことであることは、歴史学の立場からは異論なかろう。筆者の一人の白石は、オンギ川東岸にあるシャーザント（Shaazant）遺跡⁶⁾を「昔宝赤八剌哈孫倉」と想定している（白石 2002: 333-335）。このように2倉については、すでにある程度具体的な候補地はあげられている。一方で、これまで候補地が絞れていないのが「孔古烈倉」なのである。

そこは重要な穀倉であったゆえ、度々戦闘の舞台となった。たとえば、シリギ（モンゴル帝国第4代君主のモンケの継嗣）の反乱の際には、モンゴル高原西北部のハンガイ（Khangai）山地からアルタイ（Altai）山脈方面が主な戦場になったが、それに出征したオングト族長アイブガ（愛不花）は、シリギ派のサリバン（撒里蛮：モンケの孫）を「孔古烈」にて破ったという⁷⁾。シリギの乱は続くカイドウの乱と合わせると、1276年から1301年の25年間にも及ぶ中央政権に対する反乱で、モンゴル帝国の根幹を大きく揺さぶる出来事であった（杉山 1996: 148-165）。「孔古烈倉」の所在地の特定は、その戦闘の状況を知る上でも重要であろう。

そこで本稿では「孔古烈倉」を対象とし、その所在地を、文字資料および地理的・考古学的現地調査によって明らかにしたい。それはカラコルム都市圏、ひいてはモンゴル帝国興亡の解明への一助になろう。

2 文字資料の調査

2.1 古地図の検討

「孔古烈倉」は、おそらく併記されている「和林倉」のあったカラコルムや、「昔宝赤八剌哈孫倉」のあったと考えられるオンギ川流域から、そう遠くない場所だと想定できる。

これについて陳得芝は、明代の羅洪先増纂の『広輿図』所載「朔漠図」中にみられる「孔古烈倉」に注目し、「孔」は「孔」の誤りで、「孔古烈倉」のことを指すとして、その位置は図示されているようにオンギ川東岸にあるとみる。さらに、それは清代に作られた『康熙皇輿全覽図』の「紅古勒 (Hong gu le)」という山で、「孔古烈 (Kong gu lie) 倉」はその付近にあると指摘した (陳 2005: 196)。

これについて私たちは賛同できない。なぜなら、「朔漠図」のもとになったのは朱思本『輿地図』であり、元代における地理の、ある程度正確な情報が盛り込まれていると考えられているが、漠北の状況については、オンギ川の流れる方向や、和林といった主要都市の位置をはじめとして、不正確に描かれているからである。また、「紅古勒」は、乾隆期に作られた『大清一統輿図』では「轟郭爾 Hong guo er 阿林⁸⁾」にあたると考えられ、それは現在のホンゴル＝オボート (Khongor ovoot) 山 (北緯 45 度 25 分、東経 104 度 15 分) であろう。そこはゴビ (礫沙漠) 地帯で周囲には水資源が乏しく、耕作をおこない、その収穫物を蓄える穀倉を営むには不適当な地域である。いまのところ遺跡も知られていない。

代わりの候補地として私たちは『大清一統輿図』にある「空克勒 (Kong ke le)」に注目した (図 2)。「孔古烈 (Kong gu lie)」と発音上で類似しているからである。「空克勒」は清代の駅道の站のひとつとして記されており、すぐ西に、南流する「塔楚 (Ta chu) 必拉 (川)」と、それが流れ込む「錫拉布里都 (Xi la bu li du) 淖爾 (湖)」が画かれている。前者は現在のターツ (Taats) 川、後者はシャルブルド (Sharbūrd) 湖にあたる。このような位置関係から判断して、「空克勒」は現在のウブルハンガイ県ボグド (Bogd) 郡のバガ＝ボグド (Baga Bogd) 山北麓と考えられる。その周辺にて類似する地名を探すと、フンフレー (Khūnkūree) というオアシスに行き当たった。

ここで、フンフレーは清代の「空克勒」、さらに遡れば元代の「孔古烈」の転訛と考えることができよう。「孔古烈」は現代中国語では [Kong gu lie] であるが、『中原

音韻」に基づき復元した元代音では [k 'uŋ ku lie] (寧 1985) で、これをあえてカタカナで表記するならば「クンクリエ」となるうか。この「クンクリエ」が「フンフレイ」(Khünkhüree, 文語形: künker-e⁹⁾) に変化した可能性は高い。

2.2 文献史料の検討

『大元倉庫記』には、「孔古烈(「孔居烈」と作る)」に関して、より詳細な記録が残されている。そこからは、同所には「火阿塞」なる詰め所と想定できる場所があり、軍人が駐屯していたこと、寧夏からカラコルムへの糧食供給のルートに当たっていたらしいことが知られる¹⁰⁾。

糧食については銀川付近の穀倉地帯から河川でオルドス(Ordus)に漕運されたのちに、陸路で3倉を経由して、最終的にカラコルムまで供給されたのであろうが、そうであるならば「孔古烈」の地は交通ルートからすると、現在の中国内モンゴル自治区エチナ(Ejina)旗のハラホト(Kharakhot: 黒水城)を治所とする「亦集乃路」とつながっていたと考えられる。

それを示すのが『黒城出土文書』にある文書残件である(李編 1991: 145)。文書の末端部分しか残されていないため詳細は不明であるが、家奴が亦集乃路総管府に収監

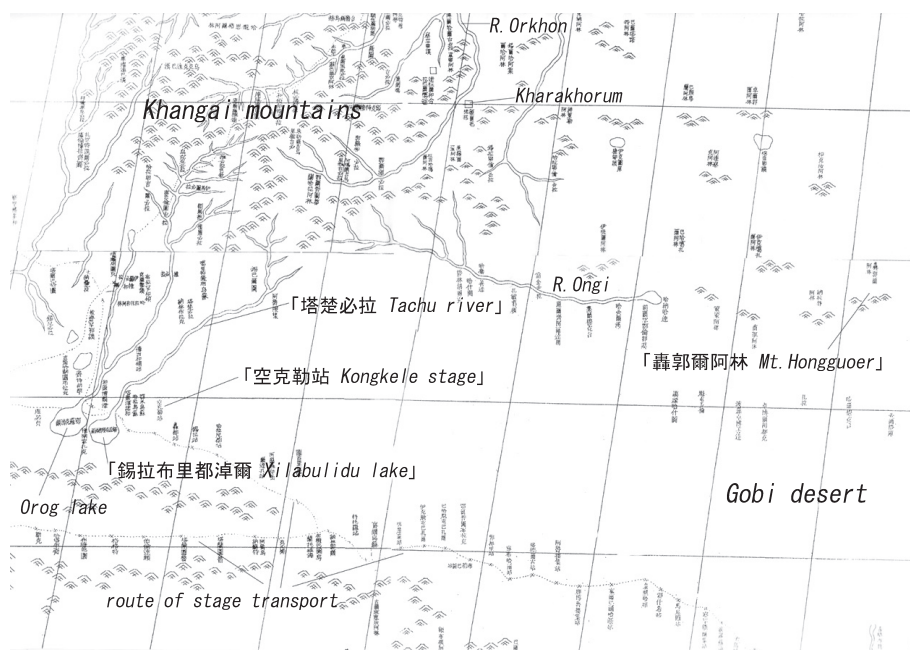


図2 『大清一統輿図』にみるフンフレイ周辺

されたことが、亦集乃城内の巡検司によって、「昔宝赤（ハ剌哈孫）」「孔古烈（＝列）」の両地域の巡検司に通知されている¹¹⁾。つまり、亦集乃路は行政上、何らかの関係を「孔古烈」と持っていたのである。「孔古烈」と関係すれば、その先にはカラコルムがある。エチナとカラコルムを結ぶ站道の線のうえに、その通交が成り立っていたことが推測される。

私たちが注目しているフンフレーは、地図でみるとエチナとカラコルムを結ぶ直線上で、しかもそのほぼ中間点に位置している。まさに「孔古烈」の最有力候補地なのである。

2.3 青銅印の検討

フンフレー地区にはシャーザン＝トルゴイ（Shaazan tolgoi）という遺跡の存在が知られている。この遺跡は1957年にペルレーにより踏査され、簡潔な報告が出ている（Perlee 1960; 1961; 1962; 1983）。「シャーザン」とはモンゴル語で釉薬のかかった陶磁器、「トルゴイ」は丘の意である（小沢編 1994: 423, 634）。遺跡の中心に丘があり、その地面に夥しい陶磁器片は散乱して、陽光を受けて光輝いている様から、地元民がこのように名付けたという。そこは土壁で囲まれた建物を伴う集落跡で、陶磁器は元代のものと考えられるという。ただ、いずれも断片的な記述で、遺跡の詳細は明らかになっていない。しかしながら、「孔古烈倉」があった可能性の高い地域に、元代（モンゴル帝国期）と考えられる遺跡が存在することは、注目してよからう。

ペルレーによると、シャーザン＝トルゴイ遺跡では1959年に青銅印1点が採集さ

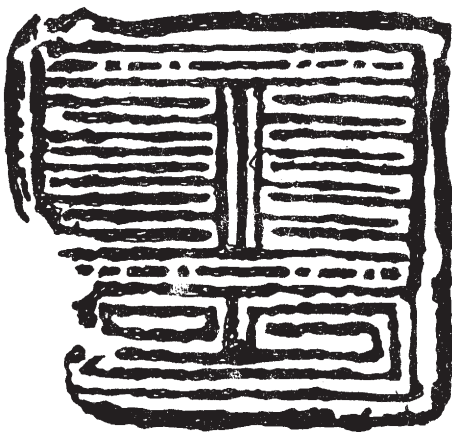


図3 ペルレー報告のシャーザン＝トルゴイ出土青銅印

れた（Perlee 1960; 1983）。ウブスハンガイ県の県都アルバイヘル（Arvaikheer）の県立博物館の管理人ツォードル（Tsodol）が発見し、ウランバートルの国立中央博物館の職員ルハムジャウ（Lkhamjav）が、ウランバートルの科学高等教育研究所の歴史研究部門に保管したとあるが、現在その所在は不明である。印面は縦7.2 cm、横8.8 cm、厚さ1.7 cmである（図3）。印文は判読されていないが、西夏文字の可能性が指摘されているという。

さらにペルレーは、ボグド郡域からほかに2点の青銅印が採集されていると述べている（Perlee 1983）。そのうち1点はアルバイヘールの県博物館に、もう1点はボグド郡に収蔵されているという。後者は日程の都合で調査することができなかったが、前者は県博物館のご厚意により実見できた。

県博物館に収蔵されているものは、台帳番号「1028」で、シャーザン＝トルゴイ採集と登録してあった。縦7.0 cm、横7.0 cm、厚さ1.1 cmで、鈕を有する。印面には篆書体で、左側面および印背に楷書体で漢字が刻してあった。

印面の刻字（図4）は「興州中屯衛中千戸所百戸印」であり、永楽元（1403）年8月に明朝の南京礼部（おそらくは礼部内の鑄印局）によって鑄造されたことが印背にある「礼部造 永楽元年八月 日」の文字からわかる。また、その鑄造番号は側面に刻されているように「興字一百三十号」であり、興州衛にかかわる官印の一つとして鑄造されたのであった。印面の刻字の摩耗は少なく、さほど使用されていないうちに所持者の手を放れたものとみられる。

興州中屯衛は洪武年間（1368～1398年）に設置され、永楽元年2月に北京の西南郊外の良郷県に駐屯することとなった軍衛である。衛は複数の千戸所から構成され、百戸所が千戸所を構成する基本単位である。ただし、千戸所が10の百戸所からなるとは限らない。一般には3～8の百戸が千戸を構成する。この青銅印は百戸の長が所持して、公文書の署名部分と貼り接ぎ部分に押捺するものであると同時に、彼の身分を証明する重要な官印である。

しかし、この青銅印がシャーザン＝トルゴイにあったことの意味については検討の必要がある。なぜ、北京付近に本来いるはずの百戸の官印が明朝の疆域からはずれているとされるモンゴルのこの地にあるのであろうか。

明朝建国当初の洪武年間、河西回廊以北の亦集乃をふくめた地域も制圧すべく、馮勝や沐英、宋晟が軍勢を率いて来襲した。この時期、モンゴル勢力を駆逐し、あるいは俘虜としたものの、積極的な経営はなされなかったようである（井上 2006: 106–109）。

短い建文年間を経て、永楽帝政権が誕



図4 永楽元年印（写真を反転、印影と同じ）

生したのは1403年のことであった。永楽帝は国家の南北ともに積極的に勢力を伸張しようとし、みずからも軍勢を率いて、5回のモンゴル親征をおこなった。このときの先遣部隊が「孔古烈」の地に至り、そのまま屯田経営をおこなったのではないかという可能性も検討したが、その証左はまったくない。ましてや、親征のルートはモンゴル高原東部にかたよっている（檀上1997: 225）。

だが、本青銅印が造られたのは、まさに永楽即位の年である。それがこの地にあることは、亦集乃との軍事的な関連性、ひいては漠北との通商とかかわっている可能性が高いように考えられる。『明実録』などに引かれる奏文は、決定された施策として本当に実行されたのか否かの判断に苦しむことが多い。亦集乃との関連で注目される記事も同様である。青銅印は、つねに史料につきまとう疑惑を永楽年間のこの時期に関してだけは解消してくれるもののように感じる。

永楽4（1406）年閏7月10日、甘肅総兵官となっていた宋晟は、1）兵卒を増派して亦集乃城を拡張し、2）商人を招集し塩（あるいは塩引か）と引き替えに糧食をおさめさせ軍糧を充実させること、3）駐屯軍に農具を給付すること、4）ハミ王家（忠順王）の部民に頭目官の任を与えることを上奏した¹²⁾。永楽帝が認可したのは第3、第4の点のみである。

また、永楽7（1409）年正月8日には、甘肅総兵官を引きついだ何福が都指揮使劉広に亦集乃を巡邏させることを請うている¹³⁾。直後の15日には涼州都督呉允誠に対して、劉広とともに亦集乃付近でオルジェイ＝テムルらの情報を収集するように命が下った¹⁴⁾。この時期、亦集乃周辺にはタタール部の頭目が多く来住している。事態は永楽帝により派遣された楊榮と現地の何福によって対処され、頭目は何福らが北京に護送したが、11月2日、何福は甘州への帰路、兵を亦集乃に駐屯させることを命じられる¹⁵⁾。

永楽年間は明朝側も積極的に亦集乃の地に関与し、偵察も史料に現れる以上に頻繁に繰り返されたものと考えられる。また、駐屯も実施され、該地の経営にあたっていた。そのなかには国内各衛から派遣された軍戸もいたのではないだろうか。そして、拠点確保のために漠北への先遣部隊あるいは偵察部隊として興州中屯衛中千戸所配下の百戸が送り込まれ、何らかの原因でこの青銅印を該地に残したのと考えことはできないだろうか。

3 地理学的調査

3.1 巨視的自然条件

フンフレー地区および周辺における現状把握とかつての農耕地の存否について、空中写真（1980年12月2日撮影）およびGoogle Earth画像（2007年6月20日段階）の判読結果および2007年6月の現地調査結果¹⁶⁾を以下のようにまとめた。

フンフレー地区は、大まかには、モンゴル南西部、北をハンガイ山地、南をゴビ＝アルタイ（Govi-Altai）山地に挟まれたノーロード（Nuuruud）盆地東端付近に位置する（図5）。アルタイ山脈の東方に位置するゴビ＝アルタイ山地ではハル＝アルガラント（Khar Argalant）、バヤン＝ツァガーン（Bayan Tsagaan）、イフ＝ボグド（Ikh Bogd）、バガ＝ボグド（Baga Bogd）、アルツ＝ボグド（Arts Bogd）の各山塊が北西西から東南東へ配列し、1957年12月4日に発生したゴビ＝アルタイ地震（Mw=8.1）により、バヤン＝ツァガーン、イフ＝ボグド、バガ＝ボグドの各山塊北麓を中心に南麓も含めて、全長約260 kmの範囲に左横ずれ断層を中心に逆断層なども含む複合

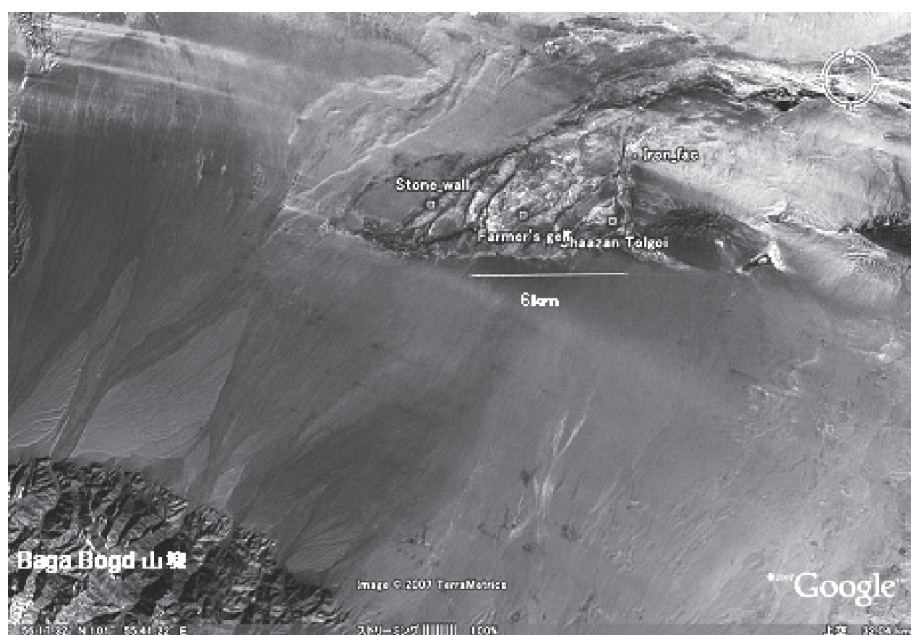


図5 フンフレー遺跡群周辺広域のGoogle Earth画像（2007年6月20日段階）

的変位が発生した (Kurushin et al. 1997)。1957 年のゴビ＝アルタイ地震で変位が発生した地域は、ゴビ＝アルタイ断層系全体からみれば東部に位置している (Mushkin et al. 2007)。なお、フンフレー地区の西方約 30 km、バガ＝ボグド山地北麓 5 km 付近のゴビには、南側が隆起した逆断層が分布する。

標高 3590 m を最高峰とする雪をいただくバガ＝ボグド山塊北麓には、1957 年のゴビ＝アルタイ地震で南上がりの変位をした逆断層が分布し、そこから礫沙漠 (ゴビ) が下流側に 10 km ほど続き、その末端部にはほぼ東西に断続的に連なる小丘陵群 (以下、「バガ＝ボグド北東丘陵群」と仮称) が分布する。ペルレーが指摘したシャーザン＝トルゴイ遺跡は、その東端の小丘陵 (シャーザン＝トルゴイ山) の頂稜から南側斜面中腹にかけて所在する (図 9: Loc. 2)。

気象条件は、フンフレー地区から南東約 50 km の、ボグド郡中心の気象観測データ (1985 年 1 月～2006 年 12 月の月平均値。1993 年 1 月～同年 6 月は欠測。図 6) によれば、月平均気温 4.0℃、月平均最高気温 19.4℃、月平均最低気温 -12.8℃、年間降水量は 127.6 mm である。これらボグド郡中心のデータは、モンゴルの中では相対的に、平均気温がやや高めで、気温の年較差が小さく、降水量がやや少ない。

ところで、ボグド郡中心の降水量は、月ごとの平均値では、7 月を最高として暖候期に多い正規分布に近い変化を示すものの、観測期間中における偏りはかなり大きい。たとえば、1991 年には 6 月 25.6 mm、7 月 8.8 mm、9 月 91.3 mm (これは観測期

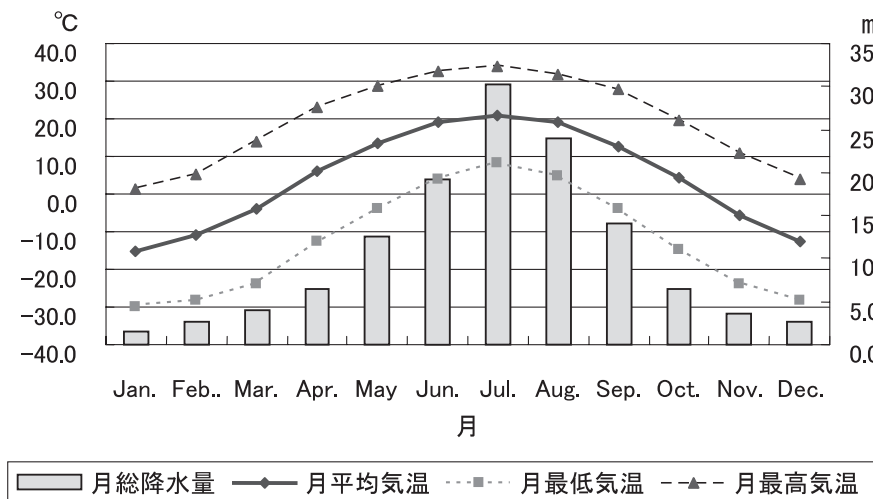


図 6 月別データからみたボグド郡中心の気候
 (1985 年 1 月～2006 年 12 月の月別平均値。1993 年 1 月～同年 6 月は欠測)

間中の最大値)、10月8.4mmである。暖候期の降水は雷雨が多い。降水強度はかなり強く、地表面への影響は少ない¹⁷⁾。

3.2 空中写真・衛星画像の判読

フンフレー地区を対象とした空中写真(図7)およびGoogle Earth画像(図8)判読による予察段階では、山麓湧水起源でほぼ並行する複数の流路、それらを直線的に繋ぐ短い人工的とみられる水路、これら流路・水路沿いの草原などの存在、さらに一部地表面における塩類集積などから、当該地域にかつての農耕跡地の残存が推定できる。

バガ=ボグド北東丘陵群では、小丘陵が幅約11kmにわたり断続的に分布し、それらのバガ=ボグド山塊側(南側)麓には、湧水帯が発達している。既述のように、湧水帯から複数の流路がこのバガ=ボグド北東丘陵群の間を北側へ流下し、最終的には合流してフンフレー川を形成している(図9)。

地元古老からの聞き取り調査によると、7本の川の名称は、西からエヘン=トゥルー川(Ekhen түрүү), バローン=エREG川(Baruun ereg), ドンド=トゥルー川(Dund

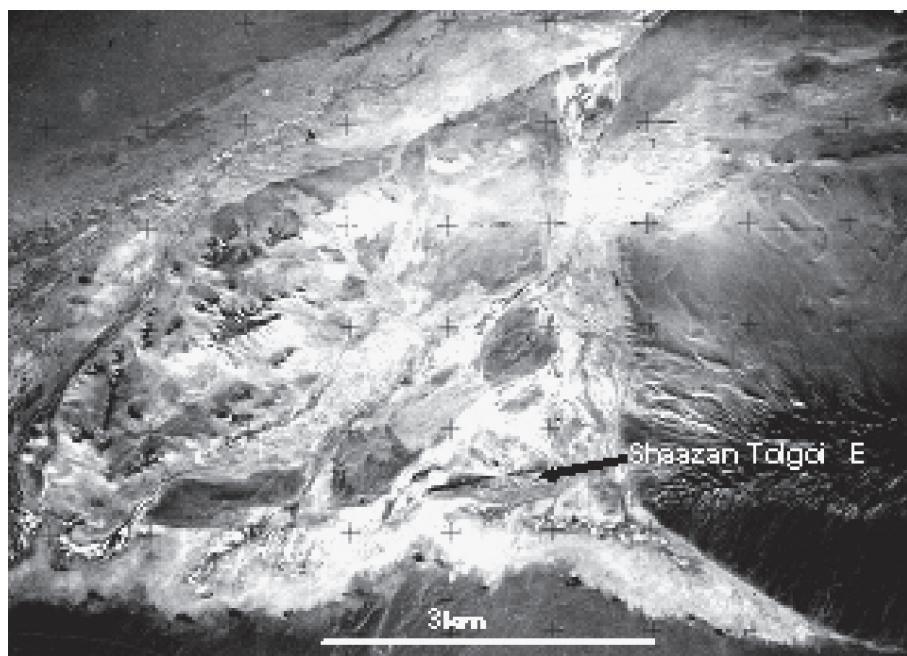


図7 フンフレー遺跡群付近の空中写真(1980年12月2日撮影)



図8 フンフレー遺跡群付近の Google Earth 画像 (2007 年 6 月 20 日段階)

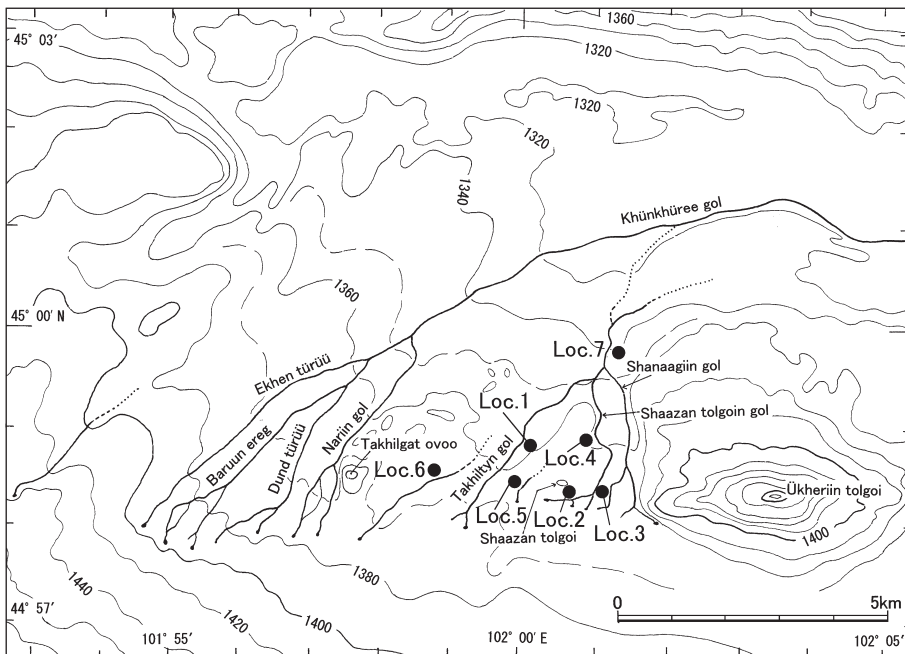


図9 フンフレー遺跡群全体図

türüü), ナリーン川 (Nariin gol), タヒルト川 (Takhiltyn gol), シャーザン=トルゴイ川, シャナー川 (Shanaagiin gol) ということであった。また, 小丘陵は西からナリーン川上流東岸にタヒルガト=オボー山 (Takhilgat ovoo), テーレミーン=トルゴイ山 (Teeremiin tolgoi), シャーザン=トルゴイ山, ウヘリーン=トルゴイ山 (Ükheriin tolgoi uul) がある。

バガ=ボグド北東丘陵群南側沿いには, 空中写真では細長い白い部分が断続的に並んでいる (図7)。実体視すると, それらの白い部分はいずれも周囲よりも低く, また, その延長はそれぞれ丘陵の間を抜ける幅狭い流路の中を, 北側へ延びている。暖候期の撮影とみられる Google Earth 画像 (図8) を判読すると, 空中写真の白い部分は黒く水域となっており, 空中写真の白い部分は凍結した水域 (池) であることが判明する。結氷した池付近は, 詳しくみると, 白く結氷した部分の縁に細い黒い筋が判読され, 非結氷部分が存在することを示している。この非結氷の流れも, 北側へ流下するにつれ断続的に白く変化し, 途中から流路幅一面が白く結氷している。

図7から, 非結氷部分は, 丘陵北側のテーレミーン=トルゴイ (図9: Loc. 6) へ続く流路の方がシャーザン=トルゴイ (図9: Loc. 2) の南側に比べて長くなっており, 冬季の湧水量が相対的に多いことを示唆している。ちなみに, 現在この地に居住している耕地の管理者は, 生活用水として, 丘陵上の住居テント (ゲル) 設営面よりも斜面下方に掘られた井戸を利用していた。

3.3 現地調査

現地調査によれば, バガ=ボグド北東丘陵群では, 小丘陵の比高は 10 m 未満であった。草地と判読した部分には, 草原と流路沿いの谷地坊主 (ブルテ: 冬季の土壤凍結が激しい湿地に形成される微地形) を伴う湿地が広がっていた。また, 丘陵南麓の流路は基本的には湧水起源の流路であり, それらをつなぎ主に東流する直線的部分は平面形状から明らかに人工的に掘削されたものであった。

地理学的調査を考古学的調査と並行しておこなうことによって, 考古遺物が検出でき, かつ地理学的に注目すべき点を7か所選択し, 重点的に現地調査をおこなった¹⁸⁾。

シャーザン=トルゴイ山南東斜面 (Loc. 2) では, 麓沿いに比高 1 m 足らずの土手状高まり (以下, 土塁) 沿いに 70 cm ほどの幅のほぼ揃った流路 (水路, 局部的に2列) が延び, さらに丘陵を横切る付近から下流側へ連続していた。また, この小丘陵斜面を, 大まかには四段ほどに階段状に区切って利用していたようすも明らかになった (図10)。

バガ＝ボグド北東丘陵群北側のシャーザン＝トルゴイ川右岸側（Loc. 3）には、流路沿いの比高 1 m 足らずの土塁にはさまれ、若干塩類が析出した泥質な裸地と背の低い草本がモザイク的に分布した平坦地が存在する。その一部には、ほぼ直線的な幅 1 m 前後の平行する微高地が 10 ～ 11 m ほどの間隔で残存していた（図 11）。後述のように、この平坦地には西夏系を含む陶磁器片が散乱し、その縁には外幅 77 cm、内径 38 cm、深さ 44 cm の四角い石臼が残されていた。以上の状況から、平行した微高地はかつての畝あるいは灌漑水路跡で、泥質な平坦地はかつての耕地跡、土塁は耕地への家畜侵入防止用と推察される。

Google Earth 画像で測定すると、大まかには、流路にはさまれた平坦地は東西約 120 m × 南北約 200 m の範囲が存在する。その東側には、同様に流路にはさまれた、幅 40 m 程で下流側へ 300 m 程延びた耕地跡と推察される平坦地が分布する。

シャーザン＝トルゴイ遺跡（Loc. 2）がある小丘陵の、西側を限る流路の西岸には、2 枚ほどのアシ層を挟む比高 70 cm ほどの泥層からなる土塁が流路沿いに残存し、近くからは後述のように磁州窯系陶器が採集できた（Loc. 5）。既述のように、付近には古い耕作地に関連すると思われる水路跡などが不規則に存在していた。またそのすぐ上流端に、土塁に囲まれた周囲よりも低い部分が存在し、溜め池跡と推定された。

Loc. 3 および Loc. 5 に分布した耕地跡は、崩壊が進んでいる時期の古い部分と、ごく最近まで利用されていたように、土塁や水路の形状が判然とした部分とがあった。両者から示唆される年代には、明瞭な隔たりが想定される。

3.4 湧水と流路

現地調査では、バガ＝ボグド北東丘陵群付近の湧水起源流路には、河床に泥が堆



図 10 階段状に平坦な区画が見える Loc. 2（南から）



図 11 シャーザン＝トルゴイ川右岸側（Loc. 3）裸地と背の低い草本がモザイク的に分布した平坦地。平行する微高地が残存する。

積していた。これらの流路では、空中写真および Google Earth 画像（図 12）の判読によれば、バガ＝ボグド山塊から連続する明瞭な流れは認められない。これに対して、バガ＝ボグド北東丘陵群から西へ外れた流路では、上流側はバガ＝ボグド山塊から流出する河川に明瞭に連続している。現地では未確認であるが、地形的には、後者の流路ではバガ＝ボグド北東丘陵群付近の河床に礫が存在するものと推察される。

ちなみに、北緯 44 度 58 分 46 秒，東経 101 度 55 分 41 秒には、冬営地用と推察される直径 40 cm 程の円礫を利用した石囲いが存在した（図 13）。これらの円礫は、近く（おそらくバガ＝ボグド北東丘陵群西の流路）から運ばれたものと推察される。河床に礫が存在することは、バガ＝ボグド山塊から融雪水や雨期（6～8 月頃）の豪雨など（両者が重なることも十分に想定される）で、上流から運搬されてきたことを示すとともに、流量（水位）の変動が大きかったことを示唆する。このことは、仮に耕地への灌漑水などに利用されていたとすれば、水路が損傷・破壊される可能性を含めて、大きなマイナス要因となる。

これに対して、湧水の場合には、流量が相対的に安定しており、運搬される土砂も泥質で水路を破損するような状況も相対的に少なかったものと推察される。ただ、湧水の特性として、夏場（灌漑期）には、気温に比べて水温がかなり低くなりやすい。

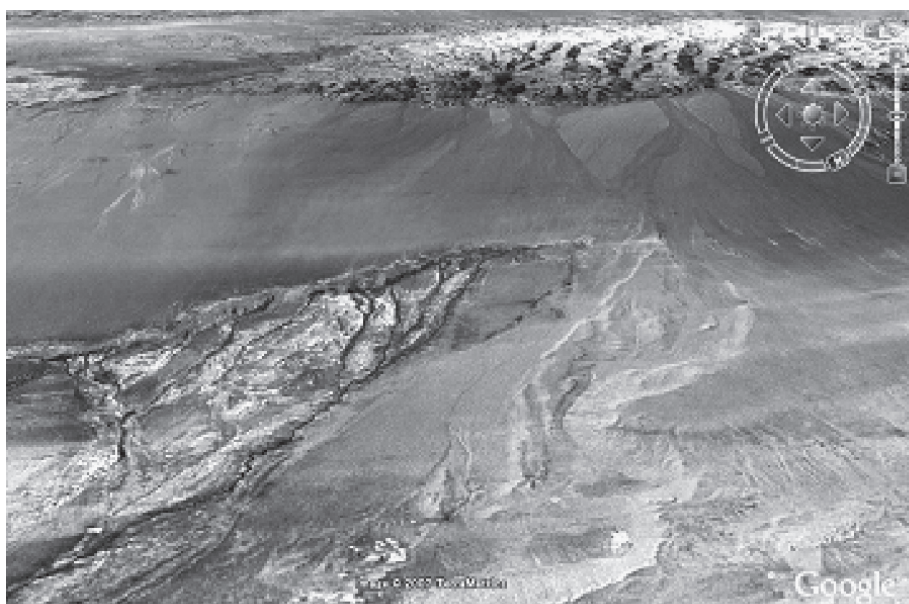


図 12 北側斜め上空からみたフンフレイ遺跡群周辺の Google Earth 画像
Baga Bogd 山塊からの流路が明瞭。



図 13 エヘン＝トゥルー川近くの石囲い

Loc. 5 には、既述のように、溜め池跡と推定される周囲よりも低い部分が存在していた。

この点に関連して、小丘陵南麓の流路には、明らかに人工的に掘削して、水流の一部を東隣の流路に合流させている例が数箇所存在する。流量を加算することに加えて、水温の上昇を期待した部分が含まれている可能性も推察される。

Google Earth 画像を利用した大まかな見積もりとして、シャーザントルゴイ遺跡地域は、タヒルト川、シャーザン＝トルゴイ川、シャナー川の合流点付近（Loc. 7）を含めると、南東隅を直角とした東西約 8 km、南北約 4 km の三角形の平面形状を呈している。さらに、合流点下流側には、幅約 1 km、長さ約 15 km ほどの塩類が析出した泥質の平坦地が流路沿いに分布し、その平坦地一部には、並行した筋状のパターンも判読される。時代については勿論不

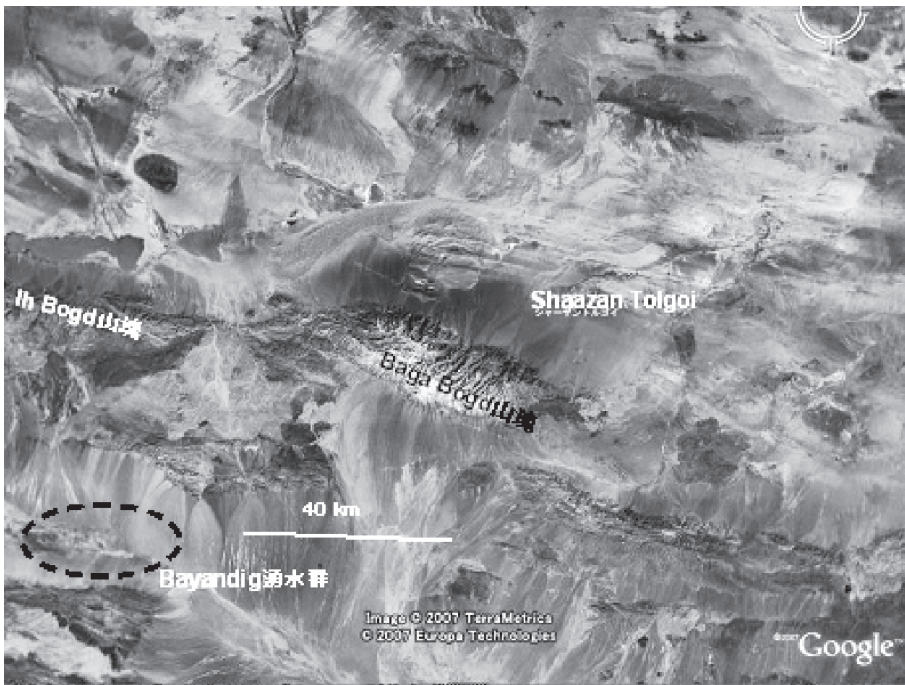


図 14 バヤンリグ湧水群周辺広域の Google Earth 画像（2007 年 6 月 20 日段階）

詳であるが、これらの筋状のパターンはかつての灌漑水路跡あるいは耕地区画跡である可能性が強く示唆される。

3.5 湧水の存在とその役割

フンフレー地域では、湧水は等高線とほぼ平行に配列していた。同様な湧水池配列は、Google Earth 画像および 1/50 万モンゴル地形図 (L-47G, L-48V) の判読によれば、フンフレー地区の南西約 100 km, バガ=ボグド山地とイフ=ボグド山地の間に位置するハルバガント (Khalbagant) 丘陵南麓のバヤンリグ (Bayanlig¹⁹⁾) 付近で唯一確認される (北緯 44 度 35 分, 東経 100 度 50 分。以下, バヤンリグ湧水群。図 14)。バヤンリグ湧水群は, Google Earth 画像の判読によれば, 主にイフ=ボグド山地南東部から南流する河川の扇端部に位置する。バヤンリグ湧水群のすぐ上流側には, 1/50 万モンゴル地形図 (L-47G 図幅) では東西に延びる幅 1 km ほどの砂丘が示されている。しかし, Google Earth 画像 (図 15) を判読すると, 単純に砂丘が分布するのみではなく, 東西に長く延びる湧水池が多いことなどから, 砂丘の下位に東西方向の微高



図 15 バヤンリグ湧水群付近の拡大した Google Earth 画像 (2007 年 6 月 20 日段階)

- 1) : 山麓で横に並ぶ湧水池群と付近の草地
- 2) : 1) から下流側へ延びる流路群とそれらに沿う草地
- 3) : 直線に囲まれた白っぽい区画→相対的に新しい耕地跡?
- 4) : 暗い細長い筋 (水路跡?) を含む、長く延びる白っぽい区画
- 5) : 各流路源流部に分布する池

地（小丘陵群）が埋没している可能性が示唆される。

湧水池からの流路沿いには、塩類が析出していると推定される、やや白い色調の細長い部分が存在する。その色調を帯びた部分には、1.3 km × 0.7 km 程の直線で囲まれた部分をはじめとして、人工的と判断される直線的なパターンを示す部分がかかなり認められる（図 15）。これらのことから、時代は不詳であるが、バヤンリグ湧水群のすぐ下流側で、かつて農耕が実施された可能性が高いと判断される。上記の明瞭な長方形を呈する部分は、比較的新しい時代（たとえば清代）に利用されていた可能性も示唆される。

Google Earth 画像を利用した大まかな見積もりとして、バヤンリグ付近の耕地跡を有する範囲は、長さ約 10 km の北辺を底辺とし、高さ約 4 km の南に頂点に向けた三角形を呈する（図 15）。ここでも、フンフレイ地域と同様に、耕地跡と推定される三角形の下流側には、幅 500 ～ 600 m、長さ 6 ～ 7 km ほどの塩類が析出した平坦地が流路沿いに延びている。

ちなみに、このような状況は、Loc. 7 の下流側、灌漑水路跡あるいは耕地区画跡である可能性が示唆した、幅約 1 km、長さ約 15 km ほどの塩類が析出した泥質の平坦地に類似している。

3.6 耕地の立地環境

フンフレイ地区の立地環境として、まず特筆されることは、湧水を含めて水条件に恵まれた点である。東西に延びたシャーザン＝トルゴイ小丘陵群の南側麓では、東流する人工水路を掘削して北流する流路へ合流させていた。これは、北流する水が灌漑用に使用されていたとすれば、明らかに流量増加を目的とした措置であろう。加えて、湧水起源の流路では、背後のバガ＝ボグド山塊から直接山麓へ到達する流路と異なり、水量が安定していることに加えて、流路や人工水路を破損させるような土砂の急激な堆積は発生しにくい。このことも、農業用水への利用にとって大きな利点である。

ただ、夏場の湧水の水温は、付近を流下する一般河川に比べてやや低くなりやすい。かつて灌漑用に湧水が使用されていたとして、この点への配慮がなされていたかについては、当時の自然観あるいは自然認識の面からも興味深い点であるが、今後の検討課題であろう。

かつての耕地跡は、空中写真と Google Earth 画像による判読および現地調査から、土手状高まり（土塁）および塩類が薄く析出した裸地などに着目すると、ある程度そ

の範囲を絞り込むことが可能であろう。敢えて大胆な推定をすると、フンフレー地区の旧耕地の範囲は、おもに、バガ＝ボグド山塊北山麓の湧水群から流出した流路に支えられた草地の生育域とその周辺の塩類化した部分までが含まれるのではなかろうか。フンフレー＝オアシスを覆う、かなりの広範囲を想定することが可能になろう。

つぎには考古資料と今回の地理学的所見を摺り合わせ、耕地跡の利用時期を具体的にしていかなければならない。

4 考古学的調査

シャーザン＝トルゴイ遺跡の最初の調査者であるペルレーによると、「“シャーザン＝トルゴイ”都市は、ウブルハンガイ県ホブド郡²⁰⁾の北境、フンフレー川の北の平原にある“シャーザン＝トルゴイ”という山(図16)の南にある。この丘の南麓には、たくさんの土塁に囲まれた建物跡があり、それらによって街が成り立っている。一部の土塁に囲まれた建物跡に関しては平面図を作成した。ここからは陶磁器が多数採集されたので、“シャーザン＝トルゴイ”という名前が付いた。ここからはいくつもの大きな石臼、石柱1点、3～4基の石ローラーが出土している。ここから北方向²¹⁾へ7～8 km行ったテーレムト＝トルゴイ(Teeremt tolgoi)という所²²⁾には、2基の大きな石ローラーがあるという。本遺跡から出土した陶磁器片の中には元朝期のものが多数含まれていることから、この都市が14世紀の工人集団の街ということが出来る」とある(Perlee 1962: 34-35)。これは、シャーザン＝トルゴイ遺跡の概要を知るための唯一の記述である。これによるとペルレーはフンフレー地区では、シャーザン＝トルゴイ山の南麓のみを踏査したことがわかる。

しかしながら、私たちの今回の調査によって、フンフレー地区にはシャーザン＝トルゴイ遺跡以外にも、広範囲に遺物が地表面に散在する、複数の地点が存在していることが明らかになった。今回確認できた地点は7か所であったが、調査が進めば、さらに多くの地点が見つかると考えている。

フンフレー地区は土壌堆積が浅く、モンゴル帝国期と想定できる遺構のほとん



図16 シャーザン＝トルゴイ遠景

どは、地表および地表下 10 cm 程度に埋没しているだけである。遺構の規模や、遺物がどの遺構に伴うのかなど、簡単な地面清掃のみで、発掘をしなくても容易に把握できるということを、あらかじめ述べておく。

以下、今回踏査した 7 か所について、その概要を述べよう。

Loc. 1 : QuickBird 衛星画像 (図 17) によれば、タヒルト川の東岸一帯の比較的広範囲に遺構と遺物が地表面から認められる。社会主義時代の耕作地跡が長さ 1 km, 幅 0.3 km の範囲に残るが (図 17b・破線), それに切られるように不規則な畦畔や水路跡がある (図 17b・点線)。それらは社会主義時代よりも、明らかに古い時代の耕地跡である。畦畔,あるいは水路跡に沿って元代の鈎窯系, 磁州窯系および景德鎮系の陶磁器片が地表面に散布していた²³⁾。他時期の遺物の混入は認められず, 耕地跡は元代の可能性が強い。

Loc. 2 : ペルレーが報告した「シャーザン = トルゴイ遺跡」である。シャーザン = トルゴイ山²⁴⁾, およびその南斜面一帯, 東西 1200 m, 南北 350 m の範囲の地表面に遺物が散乱している。山から南に向って小さな谷が入り, それによって調査区を東地区 (Loc. 2E) と西地区 (Loc. 2W) とにわけられる (図 18)。建物は傾斜地の等高線に沿うように, 段々畑状に整地された面に造られていた。

ペルレーの報告中に, 方形に土塁で囲まれた 3 基の建物跡の平面図が掲載されている (図 19)。仮に 1 号 ~ 3 号建物とすると, 規模は 1 号建物が 25 m × 50 m (1), 2 号建物は 150 m × 150 m (2), 3 号建物が 25 m × 25 m (3) である。QuickBird 衛星画像によって, そのうち 1 号建物跡と 3 号建物は西地区にあることが確認できたが (図 18), 2 号建物の所在は不明である。

今回私たちは主に東地区を踏査した。そこでは東西 700 m, 南北 250 m の範囲に, 宋・金・元代の陶磁器片, 屋根瓦, 鉄製品が散らばっていた。

図 20 の 1 は卵白釉瓷の碗。口縁外反・深腹形で, 底部は欠損している。内面全面に菊花弁状の印花文がみられ, 器厚は薄く, 胎土は白色で堅緻。この磁器は枢府窯磁ともよばれ, 景德鎮系の窯で生産された。釉色から判断して元代後期の作と考えられる。

2 は鈎窯系磁器の碗で, 底部は欠損している。釉薬は青みがかった緑色で, 胎土は黄味がかり軟質である。質的に後退した感があるので, 元代の作であろう。

3 は磁州窯系陶器の長頸瓶の体部であろう。白化粧をした器表面の一部に黒絵具をかけ, 文様を線刻した, いわゆる白地黒搔落である。胎土は堅緻で灰色を呈する。小片であり細かい時期決定は避けるが, 宋 ~ 元代の間の作であることは間違いなからう。

4は磁州窯系の白地紅緑彩の鉢である。白地の上に赤と緑の絵具で花卉と円圈文を器面の内外に描いている。この手の陶器は「宋赤絵」ともいわれる。小片なので宋～元代の作と指摘するにとどめる。

5～7は白磁碗で、内面底部に復弁八弁花文がスタンプされている。淡青白色の釉薬が高台脇までかけられ、畳付きから外底は無釉である。胎土は白色で堅緻。元代の

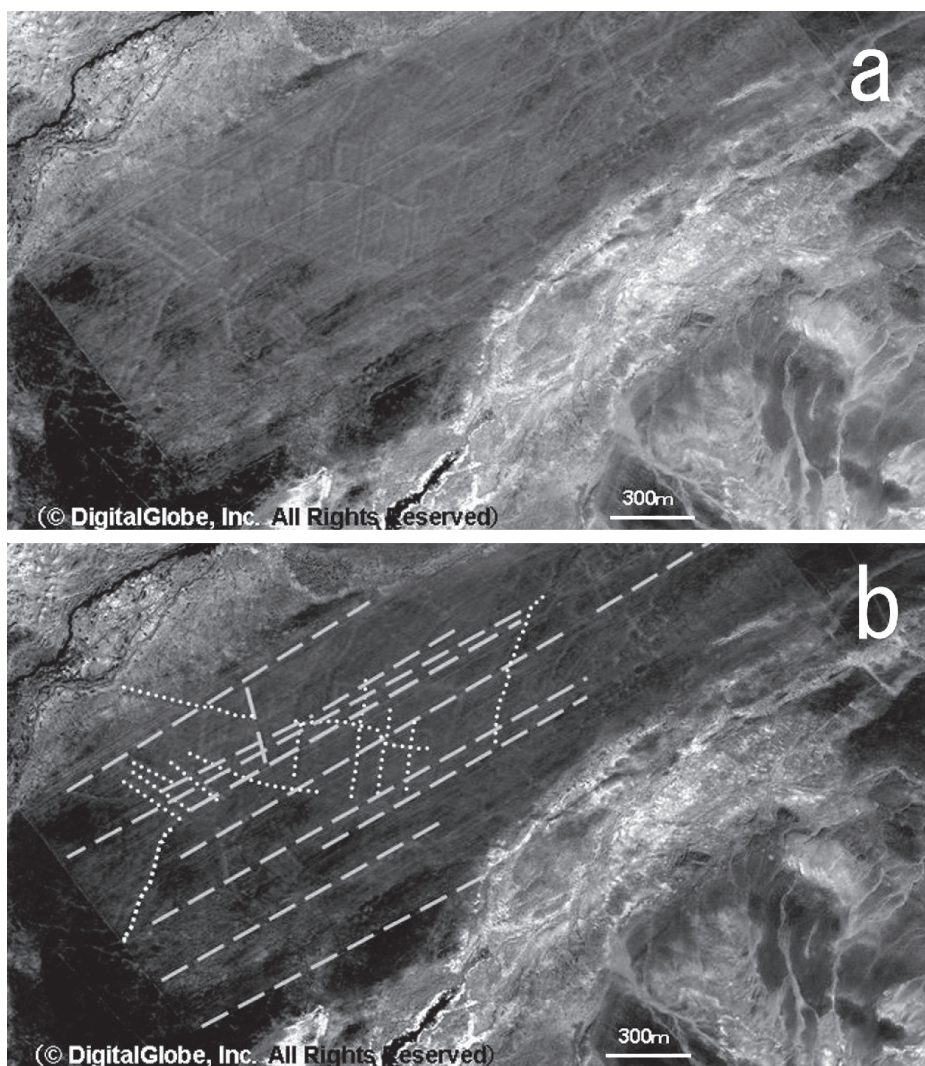


図 17 QuickBird 衛星画像から明らかになった Loc. 1 の耕地跡
a: QuickBird 衛星画像 (2007 年 5 月 11 日撮影)
b: QuickBird 衛星画像上の主な耕地跡 (畦畔あるいは水路線)。破線の方が点線に比べて新しい

景德鎮窯産に類例を求められる。

8は白釉の陶鉢である。口縁は外に向い、平らに張り出す。内外面に厚く黄みがかった白釉がかけられている。胎土も黄味がかった白色で、堅く締まっているが粒子は粗い。器内外面にロクロ痕が認められる。産地および時期は不明。

9は黒釉搔落によって花卉を描き出した陶器の鉢で、内面は無釉である。胎土は暗

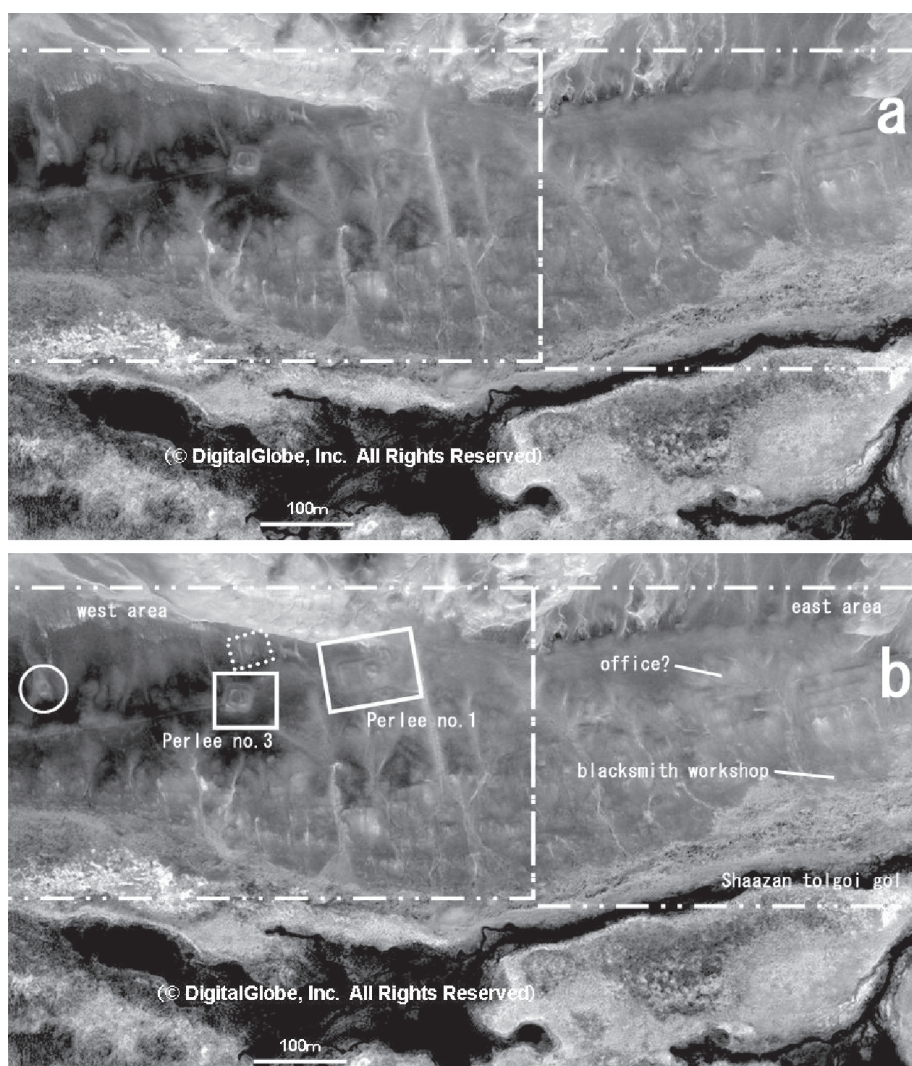


図 18 QuickBird 衛星画像から明らかになった Loc. 2 の遺構分布
a : Loc. 2 の QuickBird 衛星画像 (2007 年 5 月 11 日撮影)
b : 調査地点および主要建物跡

黄色の砂質で、黒色粒を混入している。焼きは堅緻である。寧夏靈武窯に類似品がみられることから、エチナ方面からの搬入品と考えている。時期は西夏から元代と想定している。

図 20-10 と図 21-1 は灰色陶器の甕の口縁部、図 21-2 は同じく底部である。無釉でロクロ成形である。この手の甕は日常の煮炊きや貯蔵に使われた。在地で生産されたもので、その年代はカラコルムでの調査例（白石 2002）から判断して、13 世紀第 2 四半期から 14 世紀第 3 四半期と考えられる。

建物群の最上段に、土壁で 35 m × 20 m の範囲を囲まれた建物跡がある。その建物は瓦葺きであった。50 cm × 50 cm の方形区画を設定し、10 cm ほど掘り下げたところ、獣面文の瓦当（軒丸瓦）（図 21-3 ～ 5）と、滴水（軒平瓦）（6）が出土した。

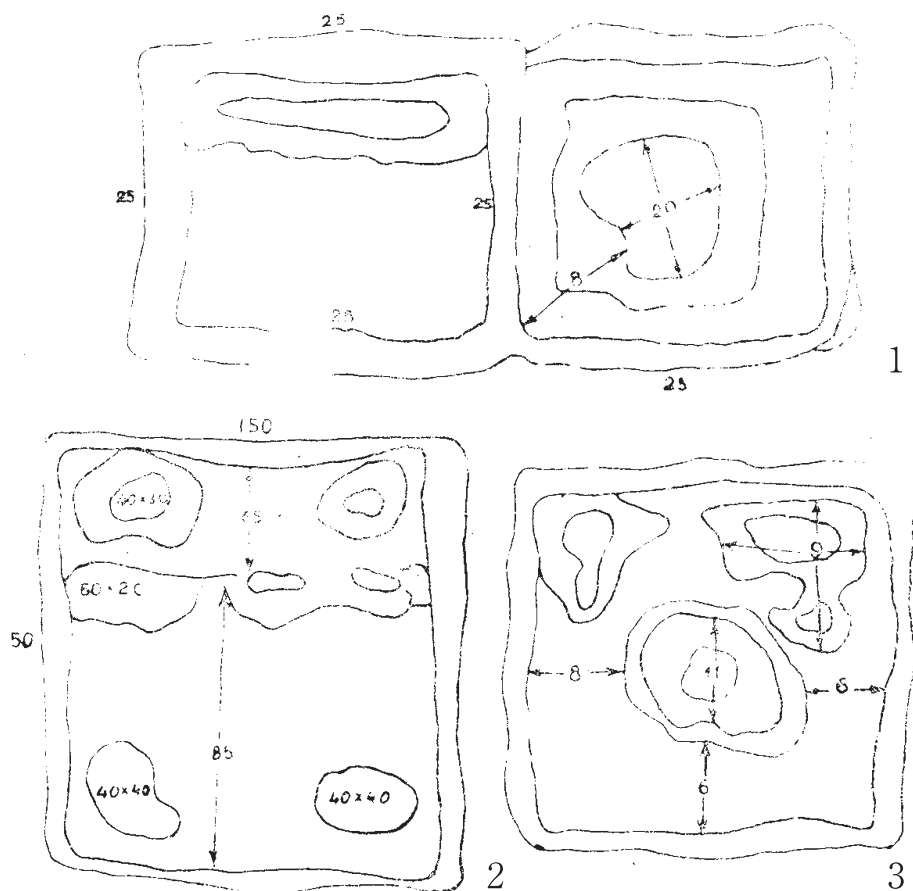


図 19 ペルレーの遺構測量図

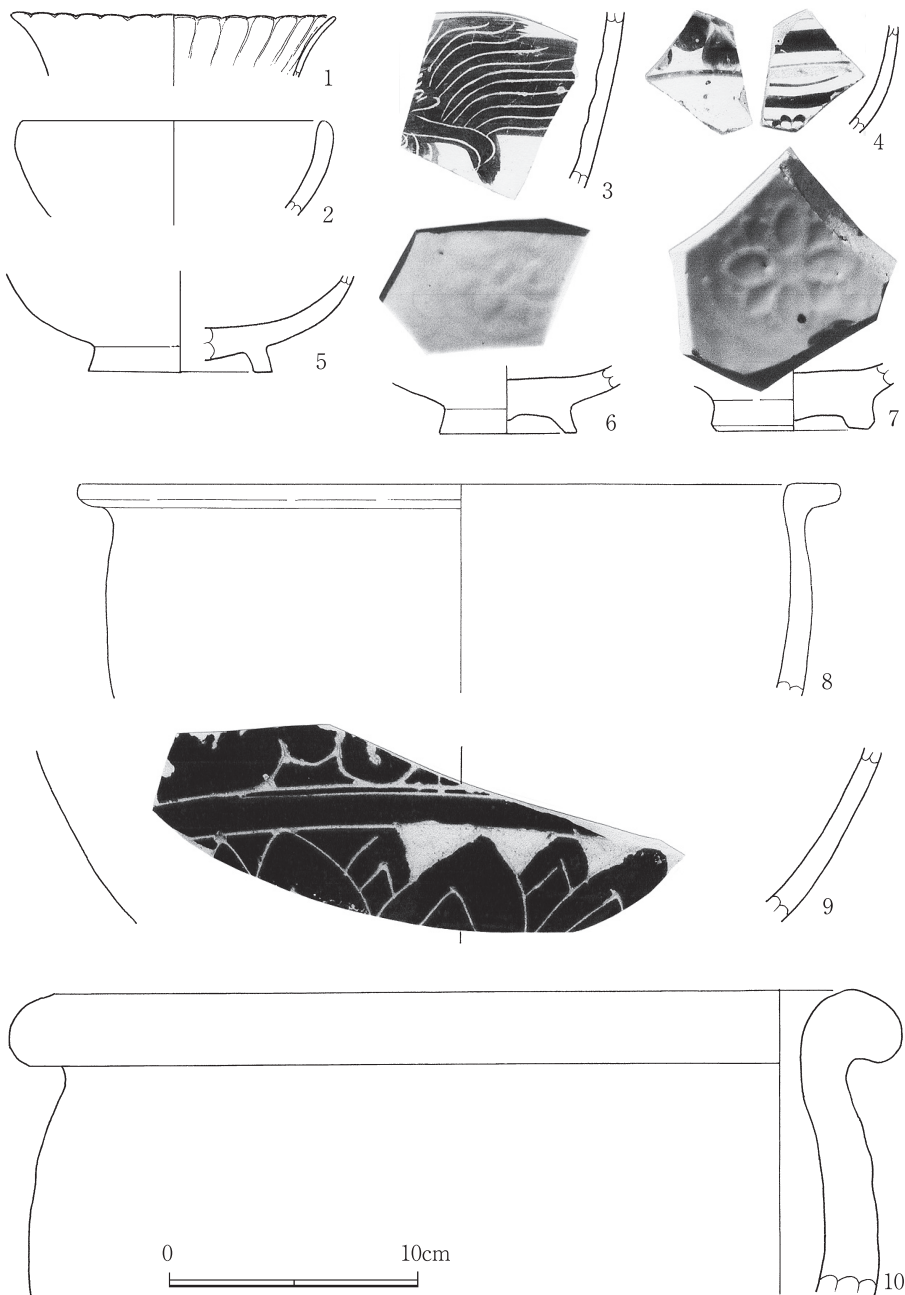


図 20 フンフレー遺跡群出土遺物 (1)

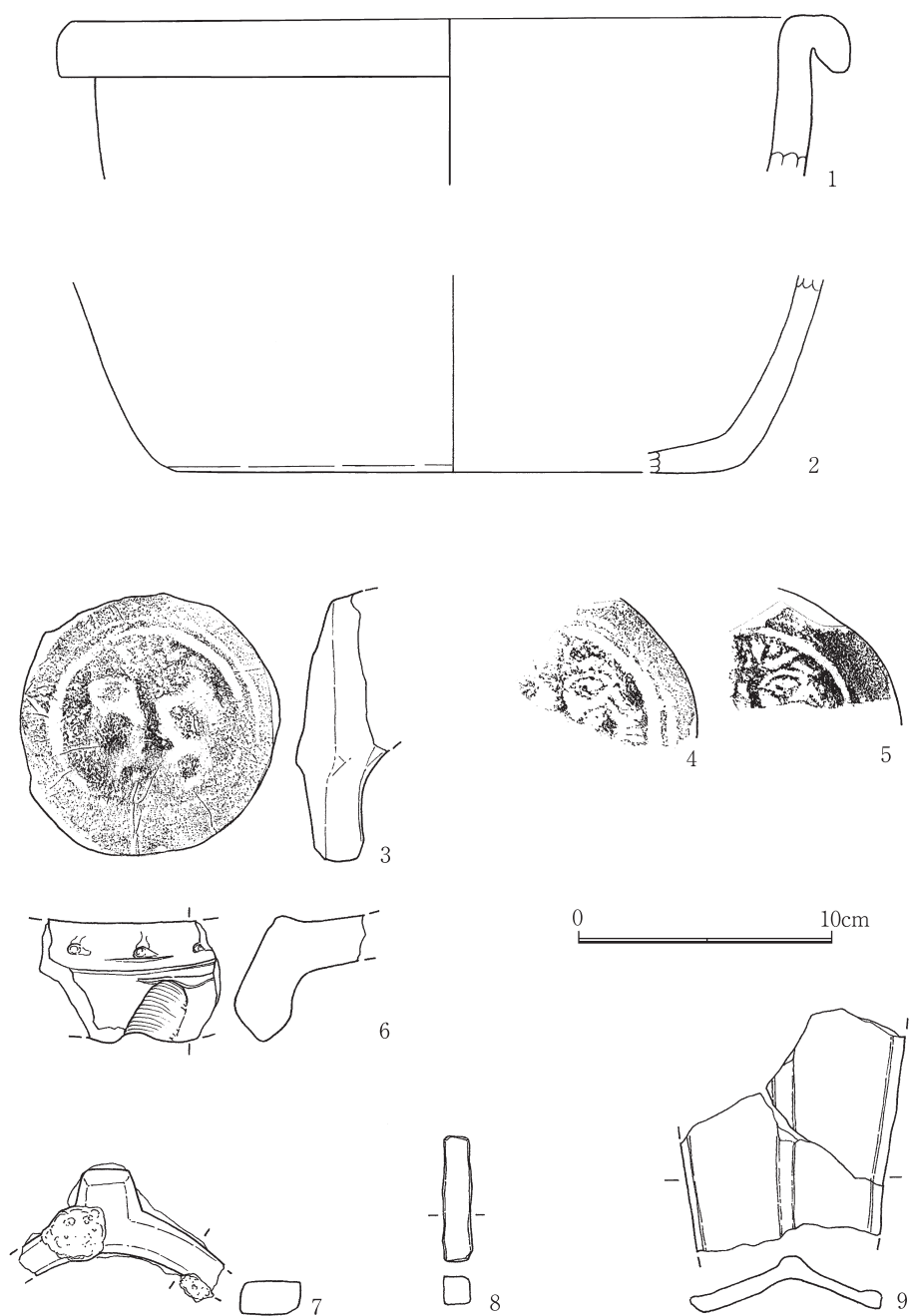


図 21 フンフレー遺跡群出土遺物 (2)

いまのところ、ほかの建物で屋根瓦が使用された形跡は見つかっていない。この建物が当時この地区内で特別な建物（たとえば役所など）であったことが想定できる。

東地区の東南隅に近い場所で、鑄鉄製の車轄（図 21-7）、棒状素材（8）、鍋の脚（9）、および多量の鉄滓と木炭が集中している部分が見つかった。そこには鉄工房があったと考えている。斜面の裾の比較的平坦な場所で、湧水地にも近く、工房を営むのに適している。

斜面のいたるところに、石臼が放置されていた（図 22）。脱穀・製粉用のものと考えられ、この地点の機能や住民の日常生活を考える上で興味深い。

Loc. 3: シャーザン＝トルゴイ川とシャナー川との中間の平坦地にある。採集品としては、元代から清代にかけての陶磁器類と、屋根瓦（図 23-1）がある。150 m × 100 m ぐらいの範囲に耕作地跡とそれに伴う水路跡が残り、耕作面の一単位の大きさは、幅 9 m 前後、畦畔の幅は 1.5 m 前後であった。畦畔の残りは Loc. 1 と比べて明瞭で残りが良い。耕地面から採取した炭化種子の放射性炭素年代は、限りなく現在に近く、測定不能であった²⁵⁾。

Loc. 4: シャーザン＝トルゴイ川下流西岸一帯の、小礫からなる微高地の南東斜面の 200 m × 500 m の範囲に遺物が散乱している。

図 23-2 は絞胎陶碗の口縁部片である。時期と生産窯は不詳。3 は黄白釉陶器の碗である。黄味がかった白釉が内面と外面上部にかけられ、高台と外底は無釉である。胎土も黄味がかり、粒子が粗く軟質である。4 は龍泉窯系青磁碗で、内面だけに暗草色釉がかけられ、高台・外底は無釉である。胎土は暗灰色で堅緻である。元代のものと考えている。そのほかにも鈞窯系など、金・元代並行期の陶磁器片が表面採集できた。



図 22 点在する石臼

Loc. 5: シャーザン＝トルゴイ西方の湧水地周辺の、500 m × 500 m の範囲に耕作地に関連すると思われる水路跡や土塁が、不規則に存在している。土塁は版築工法によって築かれていた。版築中から磁州窯系陶器の甕破片が出土した（図 23-5）。暗灰白色の地の上に、鉄絵の平行する円圈文と、「の」字状の文様が連続して描かれている。胎土は黒色で砂質だが堅緻。おそらく元代のものであろう。

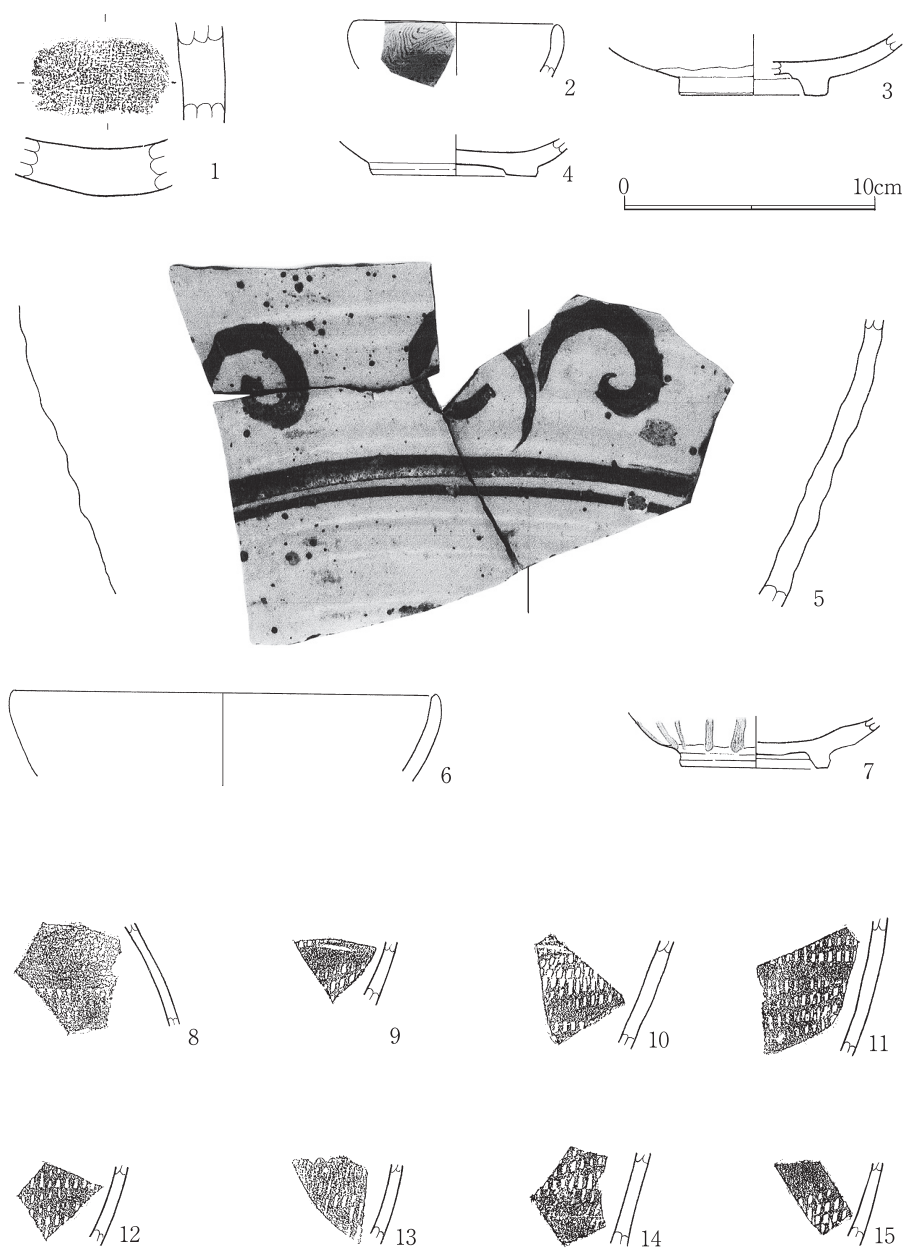


図 23 フンフレー遺跡群出土遺物 (3)

Loc. 6: テーレミーン＝トルゴイの頂上に石臼や石ローラー（碌碡）が放置されている。耕作などで周囲から出土したものであろう。周辺は現在、漿果類のツァツアルガナ（Tsatsargana, 和名スナズグミ）やジャガイモを栽培する耕作地となり、地表面からは古い時代の遺構の観察はできなかった。石臼などの年代も不明である。

Loc. 7: シャーザン＝トルゴイ川とシャナー川の合流点から約 800 m 下流の東岸一帯の地表面に、多数の陶磁器類が散乱していた。図 23-6 は灰青色の澱青釉が内外面にかけられた、鈎窯系磁器の碗の口縁部である。胎土は灰色で堅緻。良質なのでやや古めの宋・金代の所産と考えられる。図 23-7 は黄白釉陶器の碗である。胎土は黄味がかった白色で粗く軟質である。釉薬は内面と外面の上部にかかり、高台と外底は露胎である。外面の施釉部分には、淡い青絵具で、等間隔に垂下線文を施している。エチナ地域の遺跡から多く発見され、年代は西夏～元代といわれている²⁶⁾。

8～15 は櫛目状文を器外面に施文した灰色陶器の破片である。いずれも瓶形をした器の胴部の一部であろう。このような櫛目文のある陶器は、モンゴル高原では 10 世紀中頃～13 世紀初頭、すなわち契丹（遼）時代からモンゴル帝国期初期（チンギス＝カンの時代）に作られたものである（白石 2002: 189）。

また、ところどころに径 1 m ほどの鉄滓と木炭粒が集中している個所が地表にて確認できた。鍛冶炉などの鉄工房関連の遺構と想定できる。10 cm ほど掘り下げ、良好な状態の木炭サンプルを採取して放射性炭素年代測定（AMS 法）をおこなったところ、1640～1670, 1780～1800AD（IAAA-70399）という暦年補正值が得られた。

5 総合的検討

5.1 年代の確定

Loc. 7 では櫛目文の施された灰色陶器が大量に採集できた。これらは契丹（遼）時代に盛んに用いられた陶器で、モンゴル高原では 10 世紀から 13 世紀初頭にかけて使用されたと考えられるが、そのなかでも前半、すなわち契丹（遼）時代のものが胎土の質が良く、時代が新しくなるに従い、質が劣化していく（白石 2002: 43-45, 186-189）。Loc. 7 採集のものは、いずれも質がよく、そのほかにも契丹時代の器形・形成の特徴をよく備えている。まれに採集できる石器時代の資料を除き、フンフレイ地区で確実に人類の痕跡を認めることができるのは、いまのところこの契丹時代の例が最古であろう。

しかしながら、もっとも量的に出土・採集できたのは、宋・金・元代の陶磁器片であった。とくに Loc. 1 ～ Loc. 5 で採集した陶磁器片は、13 世紀後半から 14 世紀代のものが大半であった。モンゴル帝国期で、そのなかでも元代を中心とした遺跡群だと理解できる。

そのほか、若干ではあるが、Loc. 3 および Loc. 5 からは清代並行期と思われる陶磁器片が採集できた。Loc. 7 の放射性炭素年代測定結果と合わせると、清代にも生活が営まれていたことは確実であろう。

5.2 交通の要衝

フンフレー付近には石器時代以降、各時代の遺跡が数多く残り、古くから人々の往来が頻繁であったことがうかがえる (Tseveendorj et al. 2002: 38–50, 106–112, 136–145)。

フンフレー地区で確認できた人類の生活の痕跡は、契丹 (遼) 時代が最古であるが、この頃からすでに、ゴビ砂漠以北 (漠北) のモンゴル高原中央部から、アルタイ山脈を越え、天山ウイグル (現在の新疆) や甘州ウイグル (甘肅) の居住地へと出るためのルートが存在し、それがフンフレー付近を通過していたらしきことが史料からうかがえる²⁷⁾。

清代には、すでに述べたように、フンフレー地区は「空克勒站」とよばれ、その「空克勒」は「孔古烈」の転訛であると想定した。「空克勒站」には文字通り駅道の「站」が置かれた。実際に清代にこの地に人々が暮らしていたことは、今回 Loc. 7 から得られた考古学データが教えてくれる。この駅道は『大清一統輿図』(八排西二「平索營・哈密和屯」) をみると、フフホトからゴビを横断し、ゴビ＝アルタイ山地北麓を経由ののち、アルタイ山脈を越えてハミに至る幹線であったことがわかる。

時代は前後するが、モンゴル帝国期においても、現在の新疆あるいは甘肅方面からアルタイ山脈を越えて漠北に至る幹線ルートが存在し、「孔古烈」を経由してカラコルムとつながっていたことが史料からわかる。1276 年に勃発したシリギの乱では、反乱軍はアリマリク (現新疆ウイグル自治区霍城县) に拠点を置いていたが、そこからアルタイ山脈を越えて「孔古烈」まで進出してきた。「孔古烈」で政府軍と 7 度にわたり戦闘をおこなった。その出来事はカラコルムと甘肅方面とを結ぶ軍道がここを通っており、しかもこの地が攻防の舞台となるような重要な場所であったことを示していよう²⁸⁾。一方で、政府軍もカラコルムを発して南下し、「孔古烈」の異なる表記とおぼしき「晃兀兒 (huang wu er)」を経由、アルタイ山脈を越え、反乱軍を破った

後、河西（旧西夏領）へ兵を進めている²⁹⁾。

それと対応するように、フンフレー地区からは甘粛・寧夏方面と関連する考古資料が出土している。たとえば、図 20-9 の寧夏靈武窯、あるいは図 23-7 のエチナ地域に数多くみられる陶器片がそれである。さらには磁州窯系や景德鎮系といった漠地で生産された陶磁器の数々もある。それらは軍事や交易といった人々の動きによってこの地にもたらされたに違いない。その産地の広範さと多様さからみて、フンフレー地区がモンゴル帝国期に交通の要衝であったことを示しているといつてよからう。

5.3 農耕の痕跡

地理学的調査によって、フンフレー地区は湧水が豊富で、農耕に適した土地であることがわかった。実際、社会主義時代にこの地で湧水を利用した大規模な耕作がおこなわれていたことは、複数の地元古老の証言、および耕作地の踏査で確認できた。

地上踏査によって、Loc. 3 と Loc. 5 では土塁と不規則な水路跡が観察でき、前者では実際に耕地跡が、後者では溜め池状の設備も存在するという、かなり大掛りな農耕がおこなわれていたことを想起させるデータが得られた。Loc. 6 も近接して現在の耕地が存在するが、地形からみて、古くから耕地として利用されてきた可能性がある。ただし、これら3地点で耕作がおこなわれていた時期は、それを明らかにできる資料がなく、今回は意見を保留する。

また、Loc. 7 では空中写真や衛星画像をみると、広範囲に塩類が地上に滲出している状況がわかった。このことから、付近に旧耕地が広がっていた可能性もあると考えている。ただ、今回の踏査で時期を明らかにすることはできなかった。

今回、唯一モンゴル帝国期の耕作地として判断できたのは、Loc. 1 である。衛星写真よりその存在が明らかになった。地表面からの観察とあわせると、13世紀から14世紀代の陶磁器片が集中して散乱している場所と畦畔部分が重なり、この時期に耕作がおこなわれていたと推断した。

5.4 倉庫の存在

フンフレー地区に「孔古烈倉」があったとするならば、その倉庫の位置はどこなのであろうか。今回踏査した地点で、地表面から住居構造物が確認できたのは、Loc. 2 のみである。

Loc. 2 は、シャーザン＝トルゴイ山の南斜面に位置する。この比高 20 m ほどの山が、かなり良好な風障となって北寄りの風を防ぎ、また、湧水地が比較的近く、フン

フレー地区内でもっとも新鮮な水が得られ、日常生活や手工業にとって、もっとも適した場所だと考える。灰色陶器という日常の煮炊き用具も採集されているので、ここが住民の居住地区であったことは確かであろう。

Loc. 2 では地表面 1 m² あたりの陶磁器片散布量が、ほかの地点では多くても 10 点未満であったのに対し、ここでは平均的に 20 点前後であった。長期間の居住や人口の集中、あるいは物資の高密な集積など、理由はさまざま考えられるが、ここがフンフレー地域の中心的役割を果たしていたことは疑いない。

Loc. 2 が地区の中心だとしたら、「倉」もここに設けられた可能性は高い。ここには土塁で囲まれた大型住居、屋根瓦と礎石を持った建物など、規模や構造の面で、一般的な住居とは画することのできる施設が認められた。それは既述のペルレーが報告している 3 基の構造物である (図 19)。方形に土塁で囲まれ、1 号建物が 25 m × 50 m (1)、2 号建物は 150 m × 150 m (2)、3 号建物が 25 m × 25 m (3) であった (Perlee 1961: 119)。これらが倉庫の候補になろう。

それでは当時の倉庫は、いかなる構造を有していたのだろうか。中国内モンゴルの元上都遺跡では数基の倉庫跡が見つかり、報告されている (魏 2008: 196–230)。それによると、倉の基本的構造は、周囲を方形に土塁で囲んで外壁とし、外壁の内側に、壁に沿うように長方形の建物 (廩房) を何棟か整然と配列している。規模は外壁が南北 232 m × 東西 140 m と大きなものから、南北 82 m × 東西 72 m という小さいものまでさまざまであった。

上都の例を参考にしてフンフレーの例をみたとき、規模的には 2 号建物がふさわしいと考えられる。それだけでなく、外壁内部の壁沿いに建物が配列している状況も同様である。

残念ながら、地表面の浸食などで、今回の踏査でそれを再調査することはできなかった。ペルレーが 1957 年に記録した、不明瞭な図面だけが頼りなのである。ただ、倉庫に匹敵する規模と構造をもつ建物が、Loc. 2 に存在したことは、フンフレーが「孔古烈倉」の所在地であるとする、これまでの私たちの想定を、補強することは間違いない。

6 結語

以上のような検討の結果、現地名と史料中の地名との発音上の類似だけでなく、13 世紀から 14 世紀にかけて集落が営まれていたこと、アルタイ方面やカラコルムとエ

チナとを結ぶルート上に存在するという地理的位置、水資源が豊富で農耕をおこなっていたこと、倉庫に相当する規模と構造をもった建物跡が存在するという点から総合的に判断して、私たちはフンフレーが「孔古烈」の地であると結論づけたい。

ここには契丹（遼）時代に人々の生活の痕跡が認められ、宋金並行期の陶磁器も出土することから、後続するモンゴル帝国初期までには、すでに耕作がおこなわれ、それが首都カラコルムの農業生産の一部を担っていたと想定できる。仮にここが「孔古烈」か否かは別としても、モンゴル帝国を通じての穀物生産拠点だった可能性は高い。

フンフレー地区はゴビ地帯の中のオアシスという地理的にまとまった地域である。その水資源を活用して、農耕や鉄工房などの手工業を営み、一方では交通の要衝という地の利を活かし外部と結びついていたことが、文字資料と遺物によって明らかになった。そのように、内的な生産基盤の解明と、外的な影響の両面を追求できる地域こそが、私たちの企図するモンゴル時代史を新視角から解明する、という目的のためのフィールドとして最適であると考えている。

現在に目を転じれば、農耕地の拡大、草地の荒廃や鉱山開発など、こんにちのモンゴルでは、遊牧・農業・工業のそれぞれが競合し、自然環境のバランスを崩して、大きな社会問題となっている。本来モンゴル高原にて、持続可能で環境に調和した、遊牧・農耕・ものづくり（手工業）とは如何なるものか。遠い800年前、このフンフレー地区で人間の種々の営みが、競合することなく存立できたのか、それとも破綻して環境問題を引き起こしたのか。それがうまくトレースできれば、モンゴルにおける、より良い未来社会の創出に反映させられると考えている。

私たちは、歴史研究が過去の叙述にとどまるだけでは、これからの社会においては無用の長物と化してしまうと危惧している。そこで過去が、現在だけでなく、未来の人類の営みに対しても示唆を与えるような、いわば「温故知新」的な研究を企図している。その初めの一步が、この小稿なのである。

本稿は白石を代表とし、相馬、加藤が分担者として加わる日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A）「モンゴル帝国の興亡史を解明するための環境考古学的研究」（課題番号18202024）、および相馬が代表の日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A）「高解像度衛星データによる古灌漑水路・耕地跡の復元とその系譜の類型化」（課題番号19251009）の成果の一部である。

挿図出典

図1・9・20・21・23：白石作成。図2：『大清一統輿図』86, 87, 106, 107頁より白石作成。図3：Perlee1960より。図4・16・22：白石撮影。図5・8・12・14・15：Google Earth画像を相馬改変。図6：ボグド郡気象観測点のデータを元に相馬作成。図7：モンゴル国土地理院原版を相馬改変。図10・11・13：相馬撮影。図17・18：QuickBird画像より相馬作成。図19：Perlee1961: 119頁を白石改変。

注

- 1) 『長春真人西遊記』卷上「西南過沙場二十里許，水草極少，始見回紇決渠灌麥。」
『嶺北紀行』「瀕河之民，雜以蕃漢，稍有屋室，皆以土冒之，亦頗有種芸，麻麥而已。」「中即和林川也。居人多事耕稼，悉引水灌之，間亦有蔬圃。」
- 2) 『元史』卷82 選舉志2「(大德6[1302]年)和林，昔宝赤八剌哈孫，孔古烈倉改立從五品提舉司。」同卷83 選舉志3「九年(大德9[1305]年)，省准；提舉和林倉，昔宝赤八剌哈孫，孔古烈倉司史，六十月酌中錢穀官內委用。」
- 3) 『元史』卷20 成宗本紀3「(大德5[1301]年8月)庚午，禿剌鉄木而等自和林犒軍還，言：和林屯田宜令軍官廣其墾闢，量給農具，倉官宜任選人，可革侵盜之弊。」
- 4) 『大元倉庫記』22頁「(大德5年[1301]年)五月，省議：和林宣慰司所轄倉庫，除廣濟庫官別行銓注，稱海，札渾，也迭別縣，不[係]常川收糧倉分。如和林，昔宝赤八剌哈孫，孔古烈倉，收支糧斛浩大，又係緊急支持去處，擬將上項諸倉改立從五品提舉司，各設官三員，提舉一員從五品，同提舉一員從六品，副提舉一員從七品，周歲為滿，於列選人內選充，應得資品上擬陞二等，任廻別無粘帶過犯，照依元除地方選用，所歷月日，通理任內所收糧斛，若有短少，依条追陪黜降。」
- 5) 『元史』卷135 明安伝「(至元27[1290]年)明安將兵追擊于汪吉昔博赤城」。なお、「八剌哈孫(ba la ha sun)」はモンゴル語の「城郭(balgasu-n)」(小沢編1994: 48)である。
- 6) 北緯45度58分15秒，東経103度21分10秒。
- 7) 『元史』卷118 阿剌兀思剔吉忽里伝「愛不花，尚世祖季女月烈公主。中統初，總兵討阿里不哥，敗闊不花於按檀火爾歡之地。三年圍李壇于濟南，獨當一面。事平，又從征西北，敗叛王之黨撒里蜜[于]孔古烈。」
閻復「駙馬高唐忠獻王碑」『国朝文類』卷23「中統初，疊起闕牆，敗叛將闊不花於按檀火爾歡，獲其属鎮海。濟南之役，環城当南面。寇数出南門，禦以勁兵，輒復內竄，以至授首。還率所部，從大軍伐叛，西北敗叛王之黨撒里蜜於孔吉(「古」の誤りか)烈。数日之間，会戰凡七，俘獲甚衆。撒里蜜尋復來歸。」
- 8) 「阿林(alin)」は満洲語で「山」の意(羽田編1987: 18)。
- 9) 小沢重男編著(1994: 575)より。これによると現代モンゴル語の意味には「ゲルの矢来状の壁の戸に接する部分；ゲルの戸の側」と「雌牛の臀部の隆部と尾のつけねの間のくぼみの筋肉」とある。一方で，筆者のひとりであるエンフトルによると，屈曲した小川に囲まれている土地を「フンフレイ」とよぶのだという。
- 10) 『大元倉庫記』9頁「納蘭不剌倉(至元)二十六年[1289]十二月二十日，丞相桑哥，平章阿魯洋撒里等奏，『納蘭不剌建倉，寧夏府糧船順流而下，易於交卸。忙安倉糧雖是汴流，亦得其便。迤北，孔居烈裏火阿塞，塔兒海裏鎮海等處住各軍人及和林送糧，俱近進里倉囤。』上從之。」
- 11) 『黒城出土文書』(Y1: W57)
(単目多示) □
□家奴得獲捕府牢内監押施行
在城巡檢司
孔古列巡檢司 昔宝赤巡檢司 右施行

- 12) 『明太宗実録』巻57「(永楽六年閏七月)丁卯,甘肅総兵官西寧侯宋晟奏:亦集乃旧城隘小,請發卒増広之,及召商人於亦集乃,中納塩粟,以実辺儲。又請給屯軍農具,及授忠順王部下頭目官。」
- 13) 『明太宗実録』巻87「(永楽七年正月辛亥)甘肅総兵官左都督何福請……命都指揮劉広等出塞,巡邏亦集乃等処。悉從之。」
- 14) 同「(永楽七年正月)戊午,命居涼州都督僉事吳允誠等,率騎士,会都指揮劉広等,往亦集乃,覘虜情実。」
- 15) 『明太宗実録』巻98「(永楽七年十一月)庚午,勅甘肅総兵官寧遠侯何福還甘州,時福領兵駐亦集乃之地。」
- 16) 調査は2007年6月3日～6月9日に実施された。参加者は相馬秀廣,白石典之,加藤雄三,Altangerel Enkhtör, Luvsanbayar Oidovdagva(運転手)の5名である。
- 17) このほかウブルハンガイ地域の気象については鳥取大学教授篠田雅人氏のご教示を得た。
- 18) その7地点について緯度経度情報を掲げておく。Loc.1:北緯44度58分47.7秒,東経102度00分01.5秒,Loc.2:北緯44度58分25.2秒,東経102度00分37.1秒,Loc.3:北緯44度58分22.1秒,東経102度01分08.8秒,Loc.4:北緯44度58分55.5秒,東経102度00分53.4秒,Loc.5:北緯44度58分19.7秒,東経101度59分56.5秒,Loc.6:北緯44度58分33.8秒,東経101度58分21.2秒,Loc.7:北緯44度59分44.0秒,東経102度01分32.3秒。
- 19) 図14・15中ではBayandigとするが,これはGoogle Earth画像の表記に従ったためである。
- 20) 現ボグド郡。
- 21) 西方向の間違ひである。記述から判断すると伝聞調で,ペルレー自身はそこに行っていないことがわかる。
- 22) テーレミーン=トルゴイのことであろう。
- 23) 本報告における陶磁器の記述については,カラコルム遺跡出土の陶磁器を詳細に分類し図録化した専修大学グループの研究を参考にした(亀井編2007)。
- 24) トルゴイ(丘)頂上でのGPSでの計測データ。ロシア製10万分の1の地形図では1379.8m。
- 25) AMS法による。測定コードはIAAA-70400。
- 26) エチナ地域の考古学調査に長年携わってきた中国人民大学教授魏堅氏の教示。なお,セカンドオピニオンとして専修大学教授亀井明德氏からも意見を得たが,元代の可能性を示唆しながらも,断定はできないとの指摘を受けた。
- 27) 契丹(遼)は『遼史』によると924(天贊3)年と1026(太平6)年に甘州(現在の張掖)を攻撃しているが,その際,軍隊はモンゴル高原中央部のカラコルム付近から南下しているとみられる(長澤1984:341-342,346-347)。前者の攻撃では,巻2に「(天贊三年)九月丙申朔,次古回鶻城,[中略]丙午,遣騎攻阻卜。[中略](十月)丁卯,軍于霸離思山。遣兵踰流沙,拔浮図城,盡取西鄙諸部。十一月乙未朔,獲甘州回鶻都督畢離遏,因遣使諭其主烏母主可汗」とあるように,契丹軍は九月に回鶻の故城に至っている。これはカラコルム周辺に点在するウイグル時代の城郭遺跡のひとつだと考えられる。その10日後にモンゴル高原中部にいた阻卜と戦い,翌月に「流沙」つまりゴビを踰えて,「浮図城」(天山東部),さらには甘州へと進軍したことが読み取れる。後者の戦いでは,巻17に「(太平六年三月)是月,阻卜来侵,西北路招討使蕭惠破之。[中略](五月)癸卯,遣西北路招討使蕭惠將兵伐甘州回鶻」とあるように,ゴビ以北のモンゴル高原中部に治所を置いた西北路招討使の蕭惠が阻卜を破り,その直後に甘州攻撃をおこなっていることからみて,エチナから黒河をさかのぼるルートをたどったと想定できる。現在の地図を見る限りでも,フンフレイ付近を経由してオアシスをたどるルートが,もっとも安全かつ短距離で天山東部あるいは甘州へ至る。
- 28) 注7に同じ。
- 29) 『元史』巻162李庭伝「(至元13[1276]年)庭至哈刺和林,晃兀兒之地,越嶺北,與撒里蛮諸軍大戰,敗之。移軍河西,擊走叛臣霍虎,追至磧而還。」なお,本文中に示した「晃兀兒」の発音は現代北京音であるが,『中原音韻』による元代音の復元案も大差ない(寧1985:251,276)。

文 献

- Bayasgalan, J. Jackson, J-F, Ritz, and S. Carretier
1999 'Forebergs', flower structures, and the development of large intra-continental strike-slip faults: the Gurvan Bogd fault system in Mongolia. *Journal of Structural Geology* 21: 1285–1302.
- Boyle, J. A.
1974 The seasonal residences of the Great Khan Ögedei. *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*. pp. 145–151, Berlin: Akademie Verlag.
- 陳 得芝
2005 「元嶺北行省建置考（下）」『蒙元史研究叢稿』 pp. 170–200, 北京：人民出版社（初出は1989–1990『元史及北方民族史研究集刊』12-13: 10–19）。
- 檀上 寛
1997 『永楽帝 中華「世界システム」への夢』 東京：講談社。
- Google Earth
2007 Internet, 20th June and 25th December 2007, (<http://earth.google.com/intl/ja/>).
- Goto, H., Suzuki, Y., Ishiguro, S., Sugito, N., Hirouchi, D., Tsutsumi, H., Enkhtaivan, D., Batkhishig, O., Narangerel, S., Purevsuren, N., Sukhbaatar, O.
2007 Distribution of active faults in the Eastern part of the Gobi-Altay Mountains, based on interpretation of Corona satellite photographs. *Extended abstracts, 50th anniversary earthquake conference commemorating the 1957 Gobi-Altay earthquake*. Internet, 12th November 2007, (<http://www.rcag.url.mn/seis/index.html>).
- 羽田 亨編
1987 『満和辞典』（第3刷）東京：国書刊行会（初出は1937年）
- 林 俊雄
1999 「古代騎馬遊牧民の活動」『アジアの歴史と文化』7, pp. 14–31, 東京：同朋舎。
- 井上充幸
2006 「明代エチナ史素描——古地図と文献資料によるアプローチの試み」『オアシス地域研究会報』5(1): 98–135。
- 亀井明德編
2007 『カラコルム遺跡出土陶磁器調査報告書』専修大学アジア考古学研究報告書2, 東京：専修大学。
- カルピニ
1989 「プラノーカルピニのジョン修道士の旅行記」護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』 pp. 3–116, 東京：光風社出版。
- Kurushin, R. A. et al.
1997 The surface rupture of the 1957 Gobi-Altay, Mongolia, earthquake. *Geological Society of America Special Paper* 320: 143, Boulder: The Geological Society of America.
- 李 逸友編
1991 『黒城出土文書（漢文文書巻）』北京：科学出版社。
- Maidar, D. (Майдар, Д.)
1970 *Монголын хот тосгоны гурван зураг*. Улаанбаатар: Шинжлэх Ухааны Академи.
- 松田孝一
1994 「トゥルイ家のハンガイの遊牧地」『立命館文学』537: 285–304。
- Moses, L. and C. Greer
1998 Kara Korum and its Peri-Urban Environment. *Eurasian Studies Yearbook*. 70: 105–122.
- Mushkin, A. et al.
2007 Late Quaternary deformation in the Gobi-Altay Faults System. *Extended abstracts, 50th anniversary earthquake conference commemorating the 1957 Gobi-Altay earthquake*. Internet, 12th November 2007, (<http://www.rcag.url.mn/seis/index.html>).
- 長澤和俊
1984 「遼代回鶻路考」『中国正史の基礎的研究』 pp. 335–356, 東京：早稲田大学出版会。

那珂通世訳註

1943 『成吉思汗実録』 東京：筑摩書房（初版は1907年，東京：大日本図書）。

寧 繼福

1985 『中原音韻表稿』 長春：吉林文史出版社。

小沢重男編

1994 『現代モンゴル語辞典（改訂増補版）』 東京：大学書林。

Perlee, Kh. (Пэрлээ, Х.)

1960 Шаазан толгой балгаснаас олдсон үл мэдэгдэх тамга. *Studia Archeologica* 1(8): 3–6.

1961 Монгол ард улсын эрт, дундад үеийн хот суурины товчоон. Улаанбаатар: Шинжлэх Ухааны Академи.

1962 Өмнөговь Өвөрхангай аймгуудын говь талын нутгаар эртний судлалын хайгуул хийсэн нь. *Археологийн Судлал* 2(6): 27–35.

1983 Монголын тамга зүйн асуудалд. *Түүхийн Судлал* 16(5): 40–53.

白石典之

2002 『モンゴル帝国史の考古学的研究』 東京：同成社。

Shiraishi, N.

2004 Seasonal Migrations of the Mongol Emperors and the Peri-Urban Area of Kharakhorum. *International Journal of Asian Studies* 1(1): 105–119.

杉山正明

1989 『モンゴル帝国における首都と首都圏』（「イスラムの都市性」研究報告編第34号），東京：東京大学東洋文化研究所。

1992 「草原のメトロポリス カラコルムの復元」『大モンゴル』2, pp. 113–116, 東京：角川書店。

1996 『モンゴル帝国の興亡』（下），東京：講談社（講談社現代新書）。

Tseveendorj, D. et al. (Цэвээндорж, Д. ба бусад)

2002 Монголын Археологи. Улаанбаатар: Шинжлэх Ухааны Академи.

魏 堅

2008 『元上都』上卷，北京：中国大百科全书出版社。

箭内 互

1966 『蒙古史研究』 東京：刀江書院（初出は1930年）。

吉田順一

1983 「モンゴル帝国時代におけるモンゴル人の牧地と移動」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』pp. 233–253, 東京：山川出版社。

史 料

『遼史』1974，脱脱撰，北京：中華書局。

『長春真人西遊記』（王国維『長春真人西遊記校注』，国学文庫第44編所収）1937，李志常撰，北平：文殿閣書莊。

『嶺北紀行』（姚從吾「張德輝「嶺北紀行」足本校註」『文史哲學報』11: 2–38所収）1962，張德輝撰，台北：台湾大学文学院。

『国朝文類』（『四部叢刊』初編所収）1919/1929，蘇天爵輯，上海：商務印書館。

『大元倉庫記』（『大元馬政記 大元官制雜記 大元倉庫記 大元海運記』所収）1972，台北：廣文書局。

『元史』1976，宋濂撰，北京：中華書局。

『明太宗実録』（『明実録』所収）1962，台北：中央研究院歷史語言研究所。

『大清一統輿図』2003，北京：全国図書館文献縮微複製中心。